

なが
みね
長 峰 遺 跡

丸 山

平成 3 年度県営ほ場整備事業丸山
地区に伴う緊急発掘調査報告書

1992. 2

長野県原村教育委員会

な が み ね

長 峰 遺 跡

平成 3 年度県営ほ場整備事業丸山
地区に伴う緊急発掘調査報告書

表紙地図10,000分の1、○印が長峰遺跡

序

このたびの発掘調査は、県営ほ場整備事業丸山地区に伴い、諏訪地方事務所の委託を受け原村教育委員会が実施したものです。

こうした発掘を行うたびに、私どもは、現在私達が居住し毎日生活を営んでいるこの原村の地で千数百年の昔、厳しい自然環境とたたかしながら文化を創造した先人の姿を想像し、感動を覚えるとともに、そのすばらしい足跡を学べることに大きな喜びを感じるものであります。

このような遺跡、遺物を目のあたりにして、貴重な文化遺産を大切にするとともに、失われていくものを記録にとどめ、後世に伝えていく責任を強く感じるものであります。

このたびの発掘にあたり、諏訪地方事務所土地改良課の方々の御配慮、県教育委員会の御指導ならびに発掘にかかわる多くの皆様の御協力に深甚なる謝意を表する次第であります。

また、発掘報告書刊行に至る過程において、お世話いただいた関係各位に対して厚くお礼申しあげます。

平成4年2月

原村教育委員会

教育長 平林 太尾

例　　言

- 1 本報告は「県営ほ場整備事業丸山地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村柏木に所在する長峰遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から発掘調査費補助金交付をうけた原村教育委員会が、平成3年7月1日から11月8日、4年1月21日から24日かけて実施した。整備作業は、平成3年11月11日から19日、12月6日から4年1月20日、1月24日から29日まで行った。
- 3 遺構の実測は平林とし美、遺物の実測は平出一治・平林、トレークと拓本は平林、写真撮影は平出が行なった。
- 4 執筆は、平出一治・伊藤 証・平林とし美が話しのものとに行なった。
- 5 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。なお、本調査関係の資料には、13の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、芦部公一・市沢英利・児玉卓文・小林公明・小林秀夫・小林深志・関 孝一・高見俊樹・樋口誠司・武藤雄六の諸氏に御指導・御助言いただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

目 次

例 言 目 次

I	発掘調査の経過	1
1	発掘調査に至る経過	1
2	調査組織	2
3	発掘調査の経過	2
II	遺跡の位置と環境	6
1	遺跡の位置と環境	6
2	遺跡の歴史的環境	7
III	調査方法	11
1	調査区の設定と調査の方法	11
2	土 層	11
3	調査の概要	15
IV	遺構と遺物	18
1	縄文時代の遺構と遺物	18
2	弥生時代の遺構と遺物	32
3	平安時代の遺構と遺物	37
4	近世～現代の遺構と遺物	57
V	ま と め	58

図 版 目 次

第1図 原村域の地形断面模式図(赤岳-長峰-宮川ライン)	1
第2図 長峰遺跡の位置と付近の遺跡	8
第3図 長峰遺跡発掘調査区域図・地形図	12
第4図 長峰遺跡グリッド配置図	14
第5図 長峰遺跡遺構配置図	16
第6図 長峰遺跡第2・4・8号住居址、小竪穴11・12・19実測図	19
第7図 長峰遺跡第10・11号住居址実測図	21
第8図 長峰遺跡第10号住居址、小竪穴9・14出土土器拓影	23
第9図 長峰遺跡小竪穴5~10・13~16・20~25実測図	25
第10図 長峰遺跡小竪穴14~16・29出土土器拓影	28
第11図 長峰遺跡小竪穴1・4・30・32・34実測図	31
第12図 長峰遺跡小竪穴11・12・19、遺構外出出土土器拓影	33
第13図 長峰遺跡遺構外出出土土器拓影	34
第14図 長峰遺跡小竪穴19、遺構外出出土土器拓影	36
第15図 長峰遺跡第1号住居址、小竪穴3実測図	38
第16図 長峰遺跡第1・2・3号住居址出土土器実測図	39
第17図 長峰遺跡第2号住居址、遺構外出出土土製品・鉄製品・石製品実測図	41
第18図 長峰遺跡第3号住居址、小竪穴2・31、タメ1実測図	43
第19図 長峰遺跡第5号住居址実測図	45
第20図 長峰遺跡第5号住居址出土土器実測図	46
第21図 長峰遺跡第6号住居址、小竪穴17実測図	48
第22図 長峰遺跡第6号住居址出土土器実測図	49
第23図 長峰遺跡第7号住居址、小竪穴18・27~29・33実測図	51
第24図 長峰遺跡第7・8・9号住居址、遺構外出出土土器実測図	53
第25図 長峰遺跡第9号住居址、小竪穴26実測図	54

表 目 次

第1表 長峰遺跡と付近の遺跡一覧	9
第2表 長峰遺跡遺構一覧	17
第3表 長峰遺跡小堅穴一覧	61

I 発掘調査の経過

1 発掘調査に至る経過

茅野市丸山地区の農業者の強い意向によって茅野市ではじめた「県営ほ場整備事業丸山地区」内に、長峰遺跡（原村遺跡番号13）が所在していることから、その保護については、昭和62年5月に茅野市耕地林務課と協議をはじめ、同年9月10日に原村役場と現地（長峰遺跡）で行なわれた長野県教育委員会の「昭和63年度農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財保護協議」で協議された。出席者は長野県教育委員会文化課、諏訪地方事務所土地改良課、茅野市耕地林務課、茅野市教育委員会、原村教育委員会の5者であった。協議は記録保存の方向で進められたが、その実施について茅野市教育委員会と原村教育委員会の合同調査を検討したが、適切な結論を導きだすことはできなかった。

平成2年8月31日に茅野市役所と現地において「昭和63年度実施予定の農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財保護協議」で再協議を、前回同様の出席者で行なった。しかし、調査体制については進展をみることができなかつたこともあり、その後も、県教育委員会文化課、茅野市教育委員会、原村教育委員会の3者での協議を行い。最終的には原村教育委員会が調査を実施することとし、平成3年6月10日に、県教育委員会文化課、諏訪地方事務所土地改良課、茅野市基盤整備課、原村教育委員会の4者で再々協議を行ない。原村教育委員会は、諏訪地方事務所から緊急発掘調査の委託を、また、農家負担分担については国庫及び県費から発掘調査補助金交付をうけて、平成3年7月1日～11月8日と平成4年1月21日から24日にわたり緊急発掘調査を実施した。



第1図 原村域の地形断面模式図 (赤岳-長峰-宮川ライン)

2 調査組織

長峰遺跡発掘調査団名簿

団長 平林太尾（原村教育委員会教育長）
調査担当者 平出一治
調査員 伊藤 証 平林とし美
調査参加者 菊池利光 清水太助 小林静子 藤原智恵子 宮坂とし子 五味としあ
中村ふさゑ 小林ミサ 清水としみ 牛山静子（順不同）
事務局 原村教育委員会事務局 小池平八郎（教育次長） 大口美代子（係長）
宮坂道彦 伊藤佳江 伊藤 証 平出一治

3 発掘調査の経過

- 平成3年7月1日 発掘準備をはじめる。
- 10日 機材の搬入を行なう。
- 11日 教育長挨拶の後、機材の搬入、草刈り、テント設営を行う。グリッド設定を行ないA地区からグリッド発掘をはじめるが、発見遺物は、縄文時代の土器破片と平安時代の土師器破片があり、その数は少ない。
耕作土の直下が地山のローム層となる箇所もあり、保存状態は極めて悪い。
- 13日 草刈り、A・B地区のグリッド設定、A地区のグリッド発掘を行なう。ローム層までは比較的浅く、ロームを耕作土としているグリッドもみられた。ローム面までは12~20cmを計る。
- 17日 B地区のグリッド発掘をはじめる。現地で役場建設課と村道工事についての打合せを行なう。
- 19日 A地区（低地）のグリッド発掘をはじめる。灰釉陶器破片の発見が多くなる。地表下25~30cmで礫が出土する。礫は人為的なものではなく、流出によるものであり、礫面までの調査とする。なお、浅いグリッドは15~20cmの耕作土の直下が礫層となる。
- 23日 C地区のグリッド設定をはじめる。A・B地区のグリッド発掘を行なうが、遺物の発見はやはり少ない。
- 24日 AX-46グリッド掘りで住居址の床面と思われるロームの堅いタタキ面を検出する。僅かではあるが平安時代の土師器の出土もあり、平安時代の住居址と考え、便宜上第1号住居址と呼ぶことにする。

- 25日 昨日検出した1号住居址の精査（グリッド内）を行ない、住居址の埋没を確認する。
- 26日 BJ-48グリッドの調査で住居址と思われる落ち込みを確認し、第2号住居址と呼ぶこととする。
- 29日 テントの移転作業。
- 30日 手掘りで1号住居址の検出作業をはじめるが、遺物の発見は少ない。現地で諏訪地方事務所に上物（農作物・物置小屋等）の片付けの依頼とその打ち合わせを行なう。
- 31日 BE-56グリッドで平面プラン梢円形の小豎穴を確認する。現地で地元委員会と上物の片付けを行なう。
- 8月1日 1号住居址のプランがほぼ明確になってくるが、黒土中の落ち込みであり、その規模は思っていたより小さい。現地で諏訪地方事務所、地元委員会、諏訪土木と上物の片付けについて打ち合わせを行なう。
- 2日 AV-52グリッドで小豎穴2の落ち込みを確認するが、半分はAW-52グリッドにかかっている。
- 5日 手掘りで2号住居址の検出作業をはじめる。上物である古材の片付けをはじめる。
- 6日 小豎穴の検出作業。
- 7日 AX-50グリッドで住居址と思われる落ち込みを認め、3号住居址と呼び、手掘りで検出作業をはじめる。
- 8日 1号住居址の検出作業と検出写真の撮影。小豎穴1～4の検出写真の撮影。その後小豎穴1・2の精査をはじめる。
- 9日 小豎穴1・2のセクション写真。4号住居址、小豎穴5を確認し、手掘りで検出作業をはじめる。
- 19日 現地で村道工事について、諏訪地方事務所、両角建設、諏訪土木、役場建設課と打ち合わせを行なう。
- 20日 3・5号住居址の検出作業を行なう。
- 22日 3号住居址の検出作業と検出写真の撮影。その後南北方向に土層観察ベルトを残し、住居址の精査をはじめる。タメ1の精査をはじめる。重機で表土剥ぎを行なう。
- 23日 重機で表土を剥いだ地区的平面発掘を行ない、遺構検出作業をはじめる。
- 28日 6号住居址を確認し、検出作業を続ける。
- 9月2日 2・4号住居址の検出作業と検出写真の撮影。その後南北方向に土層観察ベルトを残し、住居址の精査をはじめる。

- 3日 小豎穴の検出作業をはじめる。
- 4日 6号住居址、小豎穴5・6の検出作業と検出写真の撮影。その後東西、南北方向に土層観察ベルトを残し、住居址の精査をはじめる。
- 6日 7号住居址を確認する。
- 9日 6号住居址の竈西側で土師器・灰釉陶器が比較的まとまって出土する。7号住居址の検出作業をはじめる。
- 12日 7号住居址の検出状況、6号住居址の埴土状況、小豎穴の検出状況等の写真撮影を行なう。2号住居址から鉄製品が出土する。
- 17日 住居址と小豎穴の精査を続ける。2号住居址の精査途上で、2・4号住居址と重複する8号住居址を確認する。平安時代に帰属する2号住居址と8号住居址の重複関係は、8号住居址が古く、2号住居址が新しい。今日から上物である一位の庭木の抜取り作業がはじまる。
- 20日 8号住居址の精査と遺物の取り上げを行なう。
- 21日 住居址、小豎穴の精査を続ける。
- 24日 今日からC地区の表土剥ぎを重機ではじめる。
- 25日 C地区的平面発掘を行ない、遺構検出作業をはじめる。
- 26日 9号住居址を確認する。
- 27日 9号住居址の検出作業と検出写真の撮影。その後南北方向に出土層観察ベルトを残し、住居址の精査をはじめる。
- 28日 昨夜の台風19号でテントを飛ばされる。後片付けとテントの設営を行なう。10号住居址の埋没を確信し、検出作業をはじめる。
- 30日 10号住居址の検出作業と検出写真の撮影。小豎穴の精査を続ける。
- 10月2日 5・9・10号住居址の精査、小豎穴13~16の検出作業。
- 3日 住居址の精査と小豎穴の検出作業を続ける。
- 10日 小豎穴の検出作業を続ける。
- 15日 住居址・小豎穴の実測作業をはじめる。
- 16日 5号住居址の礫の取り上げと精査、小豎穴の精査等を行なう。
- 17日 小豎穴の精査を続け、5号住居址の実測をはじめる。
- 18日 小豎穴の精査を続け、6号住居址の実測をはじめる。
- 11月2日 A・B地区的写真撮影を行なうが、すでに工事で破壊された遺構もあり、全体の写真撮影はできない。
- 5日 集石を伴う小豎穴34の精査をはじめる。
- 6日 小豎穴の精査と実測を続ける。上物（物置小屋）の撤去ができないため、一部未調査部分を残しているが、後日の調査とし、グリッド杭の片付けをはじ

める。

7日 小豎穴の実測と片付けを行なう。

8日 小豎穴の実測、テント・発掘機材の撤去を行なう。

平成4年1月21日 上物（物置小屋）が片付き再調査の準備をはじめ、グリッド杭の搬入を行なう。

22日 機材の点検と搬入を行なう。

23日 重機で表土剥ぎを行ない、引き続いて平面発掘を行ない溝を検出し、実測を行なう。

24日 機材の撤去と水洗いを行ない現場作業は終了する。

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と自然環境

長峰遺跡（原村遺跡番号13）は、柏木区の北方、茅野市丸山区との境界近くの長野県諏訪郡原村7373番地付近に位置する。標高は926m前後を測り、当地方における遺跡密集高度であり、付近には数多い遺跡が点在している。なお、原村における遺跡の高度限界は1200m前後のラインである。

このあたりは八ヶ岳西麓に位置し、東西に細長く発達した大小様々な尾根がみられる。その一つである裏沢川と前沢川にはさまれた馬の背状の“やせ尾根”と緩やかな南斜面が遺跡である。南を流れる裏沢川までは250mを計り、その比高差は3m前後で、沢までの平坦部は水田となっている。北の前沢川側の傾斜は強く、その比高差は10mを測る。

遺跡は、尾根の南肩部を東西に走る農道によって二分された格好であり、農道より南側の畠地を、平坦化させるための削平が極めて著しい。発見した住居址は農道下に埋没していたものが大多数で、そのため、住居址南側は削平によって破損された状態であった。削平が深い箇所はローム層が1m以上も削られていた。

地目は普通畠と桑畠であるが、桑は径10cm位と大きなものとなっている。付近一帯は水田であり、遺跡は水田地帯の中にある小高い尾根に立地していたため破壊を免れてきたものと思われる。なお、水田造成の遅いものは昭和30年代と聞いている。

地味は、尾根上はロームを耕作土としている箇所もみられ、黒土の堆積は厚くない。南斜面からその南の低地は数多い礫が散乱しあまり良くない。遺跡内には礫を拾い集めた結果できた石の山（ヤッカ）が数ヶ所みられる。また、調査期間中は雨の日が多く、調査したグリッドには水が溜り、なかなか引けない状態であった。そんなことから水位は高いものと思われる。

この尾根筋には、東方の八ヶ岳に向かって約450mに原村遺跡番号14の裏長峰遺跡（平安時代）、約1000mに同15の程久保遺跡（縄文・平安時代）、約1300mに同23の恩勝西遺跡（縄文時代）、約1600mに同24の恩勝遺跡（縄文時代の大集落跡）が標高910～1000mの間に点在している。また、南西方約1200mには国の史跡である原村遺跡番号11の阿久遺跡（縄文時代の大集落跡と平安時代）、東南約1000mには同20の前尾根遺跡（縄文時代の大集落）等の縄文時代と平安時代の数多い遺跡が埋蔵されている（第2図、表1）。

これより西方、約2000m先でホオツサマグナの西縁である糸魚川-静岡構造線の断層崖に沿つて北へ流れる宮川によって断ち切られる。

2 遺跡の歴史的環境

本遺跡の発見はそう古いことではなく、昭和48年から諏訪清陵高校地歴部考古班が「原村の考古学的調査」と題して実施した分布調査の折に、土器破片を探集し「長峰B遺跡」と呼称したことにはじまる。その報告には次のように記載されている。長くなるが全文を紹介してみたい。

長峰B遺跡

地勢・環境

この遺跡は、まわりを水田に囲まれた、丸山一柏木間に広がる。平坦地のほぼ中央部、海拔920mに立地し、付近には小川が流れている。

遺物

土器

本遺跡は縄文中期土器4片、土師器6片、須恵器1片を探集したが、それぞれ小破片のため識別不可能である。なお土師器の1片に底部破片が1片あったことを、特筆しておく。

石器

石器は、表採されなかった。

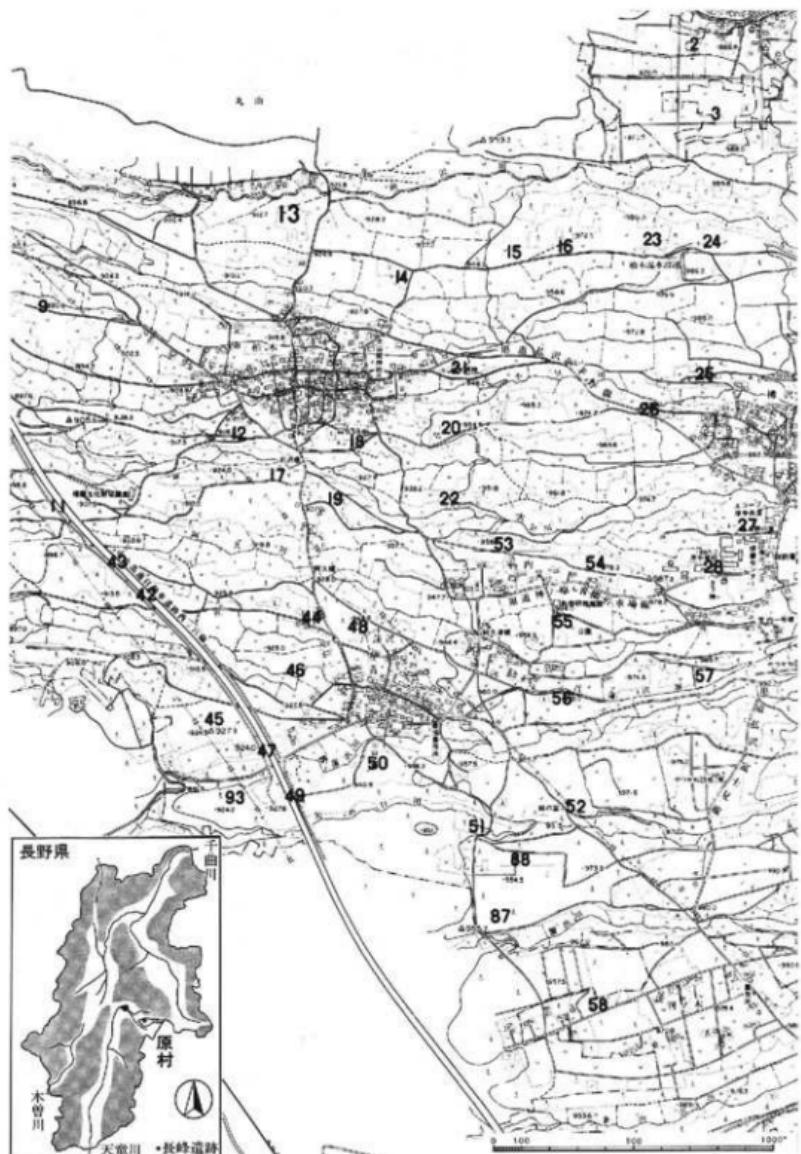
まとめ

時代間隔は広い遺跡であるが、遺物の少ない事もあって、時代細分、さらには遺跡の性格を知ることができないのはまことに残念である。

尚、原村には、本遺跡のように、中期を中心とする縄文時代と土師、須恵の遺跡が同じ地に立地している例が多いことを報告しておく。

その後は、昭和54年度に長野県教育委員会が実施した八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査や、村誌編纂に伴って実施した分布調査があり、いずれも僅かな土師器の破片を探集している。なお、昭和62年に行なわれた保護協議の折には、比較的数多い須恵器の大甕破片と土師器の破片を探集している。

遺跡名については、前記した諏訪清陵高校地歴部考古班「長峰B遺跡」と呼んでいることでもわかるように、その名に違ひがみられる。これは、原村における分布調査が、長野県教育委員会、



第2図 長峰遺跡の位置と付近の遺跡 (1:20,000)

表1 長峰遺跡と付近の遺跡一覧

番号	遺跡名	旧石器	縄文								備考				
			草	早	前	中	後	晚	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	
1	家裏	○				○					○				昭和59年度発掘調査
2	大久保前根	○				○					○				昭和54年消滅
3	向尾	○				○									昭和54年度発掘調査
9	比丘尼原	○				○									
11	阿前	○	○	○	○	○	○				○	○			昭和52～54年度発掘調査
12	長裏	○	○	○	○	○	○		○		○	○			昭和55・61年度発掘調査
13	長程	○	○	○	○	○	○		○		○	○			平成3年度発掘調査
14	白ケ	○				○					○				
15	白ケ尾根	○				○					○				
17	前尾根	○				○					○				昭和53年度発掘調査
18	前南	○				○					○				昭和51年一部破壊
19	前尾根	○				○					○				
20	上居沢尾根	○				○					○				昭和44・52～54・59年度発掘調査
22	清思	○				○									
23	勝思	○				○									昭和62年度発掘調査
24	裏尾根	○				○									昭和62年度詳細分布調査
25	家闘	○				○									
26	開宮	○				○									昭和59年度発掘調査
27	中尾根	○				○									昭和62年度発掘調査
31	居沢尾根	○				○									
42	中阿久山	○				○									昭和50～53・56年度発掘調査
43	中原日向	○				○									昭和51年度発掘調査
44	広原日向	○				○									昭和50年一部破壊
45	宿原	○				○									昭和58年度発掘調査
47	ヲシキ木	○	○	○	○	○									昭和51年度発掘調査
48	橡の木	○	○	○	○	○									昭和53年一部破壊
49	大石	○	○	○	○	○									昭和50年度発掘調査
50	山の神原	○	○	○	○	○									昭和54年度発掘調査
51	姥ヶ原	○	○	○	○	○									平成元年度発掘調査
52	水掛	○	○	○	○	○									
53	雁頭根	○	○	○	○	○									昭和54・57・63年度発掘調査
54	宮ノ尾根	○	○	○	○	○									昭和57・58年度発掘調査
55	中尾根	○	○	○	○	○									
56	家前尾根	○	○	○	○	○									昭和51年一部破壊
57	久保地尾根	○	○	○	○	○									昭和51年一部破壊
58	判の木	○	○	○	○	○									
87	下原山南	○	○	○	○	○									平成元年度発掘調査
88	下原山北	○	○	○	○	○									平成元年度発掘調査
93	大石西	○	○	○	○	○									平成3年度発掘調査

長野県考古学会、前記した諏訪清陵高校地歴部考古班などによって度々行なわれ、村内に所在する数多い遺跡は、同一遺跡でありながら調査者によって遺跡の名が違っていたり、遺跡は違っているのに同じ遺跡名を使っているなどで、混乱していた遺跡が少なくなかったことから、昭和54年度に実施した「八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査」の折に、本遺跡名も「長峰B遺跡」から「長峰遺跡」に改めて今日に至っている。

III 調査方法

1 調査区の設定と調査方法

発掘に先立ち、東西南北（磁北）に軸を合わせたグリッドを設定した。東西方向には50mの大地区を設け、西からA地区・B地区・C地区・D地区というようにアルファベットを用いて地区割りをした。大地区の中をさらに $2 \times 2\text{ m}$ の小地区（グリッド）に分割し、東西方向は西からA～Yのごとく区分した。南北方向には算用数字をふったが、遺跡の中心と思われるラインを50とし、そのラインを基準に南方向は49・48・47というように南にいくにしたがい小さくなるように、北方向は51・52・53と大きくなるように振分けた（第4図）。

個々のグリッドの呼びかたは、たとえば第4図左上の $2 \times 2\text{ m}$ の発掘グリッドをみると、大地区はA区であり、小地区的東西方向はLラインにあたり、南北方向は58ラインで、それは「L-58」となる。したがって小地区的前に大地区を表記した「AL-58」となる。

発掘調査の対象は、平成3年度県営は場整備事業丸山地区にかかる遺跡の全域におよぶ（第3図）。

準備期間中に数回におよぶ踏査を行ない調査方法を検討し、はじめは表土の厚さがわからないことと、農作物や物置小屋など発掘調査を進める上で、障害となる上物のあったことから空いている地点、また空くのを待つて順次手振りでおこなった。遺跡の性格が確認でき、広い範囲の上物が片付けられた時点からは、重機で表土剥ぎを行ない遺構の検出に努めた。

発掘調査は原則として尾根上から緩やかな斜面はローム層の上面、低地でローム層の堆積が不安定な個所は含礫ローム層上面まで層位別に行なった。

遺物は、基本的にグリッド別・層位別にとり上げ、遺構に伴うものは遺構別に取り上げた。

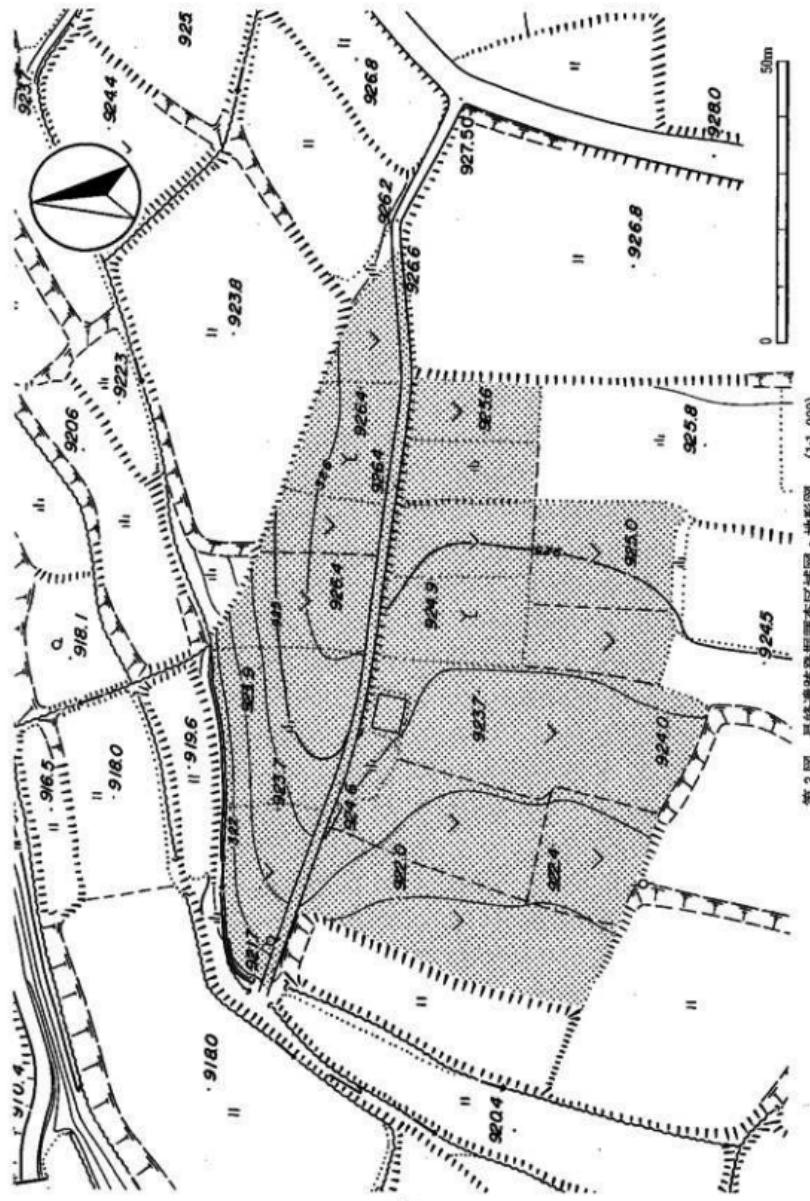
測量は、予め設定した 2 m 四方のグリッドを基準とするやり方方式による。

2 土層

長峰遺跡の発掘調査は、486グリッド、 $1,924\text{ m}^2$ の平面発掘を層位別に実施した。

本遺跡における層序は、尾根上と斜面、そして平地（低地）では違いがみられた。それは尾根幅が狭く土層が安定していないことによるものと思われた。

尾根上から緩やかな南斜面は住居址が発見された地区で、地山のローム層までの深さは比較的浅い箇所が多い。層序はしっかりしているところもあったが、不安定な箇所の方が多い。中にはロームを耕作土としている箇所もみられるなど最悪の状態であった。基本的には上層から黒褐色土



第3图 长峰遗址发掘平面图·地形图 (1:1,000)

(表土)・黒色土・黒褐色土・褐色土・ソフトロームである。

表土である耕作土の直下がローム層となってしまう箇所は広範囲におよび、表土の直下がローム層となることは、土の堆積事態が薄かったことも充分考えられることであるし、尾根幅が狭く馬の背状の傾斜地では土の流出も多かったようである。

おおまかな観察結果を記しておきたい。

尾根上

第I層 黒褐色土層 表土層・畑の耕作土で12~20cmの厚さである。

第II層 黒色土層 第I層よりしまっている。13~35cmを計り、ローム層までが深い箇所はこの層が厚く堆積していた。上部からは平安時代の遺物が、下部から第III層にかけて僅かではあるが繩文時代の遺物が出土している。

第III層 黒褐色土層 しまり堅さは第II層と同じである。この層の認められない箇所もある。

第IV層 褐色土層 いわゆるローム漸移層である。

第V層 ソフトローム層

低地は、地表面に礫が散乱する。礫層ないしは含礫ロームまでの深さは比較的深いが、グリッドによってまちまちであった。この土の厚さは、前記したように馬の背状の尾根から流出した土を留めているためと思われた。

低地

第I層 黒褐色土層 表土層・畑の耕作土で15~20cmの厚さである。尾根上より黒色は強い。

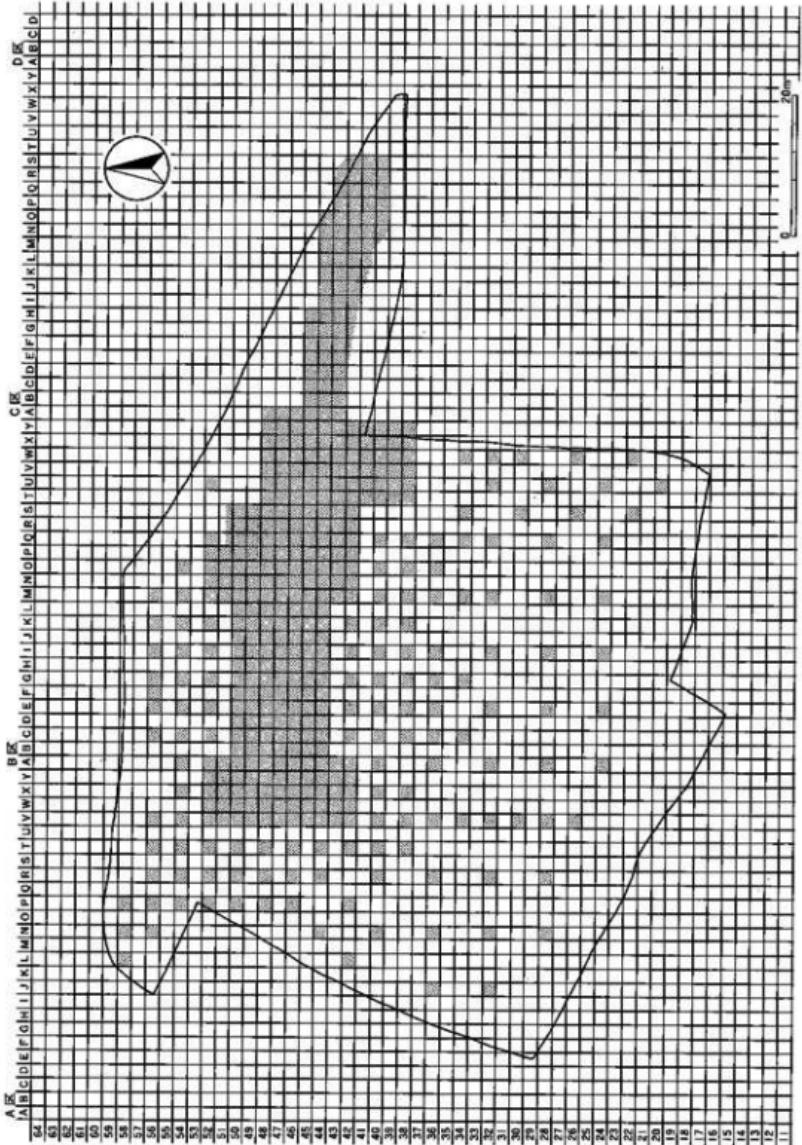
第II層 黒色土層 第I層よりしまっている。厚さ30cm前後を計る。

第III層 真黒色土層 20~30cmを計る。尾根上では認められないもので、含礫ローム層までが深い箇所はこの層の堆積が厚くなる。下部には礫が含まれている。礫の大きさは握り拳大から頭大よりやや大きなものまでまちまちである。繩文時代の遺物が僅かに発見されている。

第IV層 合礫黒褐色土層 磯の大きさは第III層と同じであるが、礫が多くなり礫層と呼んでもよい状態であった。

第V層 合礫褐色土層 磯の大きさは第III・第IV層と同じである。色調が褐色となる以外は第IV層と変わることはない。

第VI層 合礫ローム層



3 調査の概要

発掘調査は、平成3年度県営ほ場整備事業丸山地区に先立つもので、平成3年7月1日から4年1月25日にわたって実施したが、作物や物置小屋等の関係で、一時期に遺跡全面を剥ぐことができない状態であった。

したがって、遺構全景をはじめ調査地区全域の写真撮影もできないなど、破壊されていく遺跡であるにもかかわらず、その調査はあまり良いものではなかったように思う。

調査の結果、尾根南斜面で縄文時代中期の住居址3軒・尾根上の平坦部で縄文時代と弥生時代の小豎穴47基、やはり南斜面で平安時代後期の住居址7軒を検出調査したが当初思っていたよりも遺構の発見が多い。その分布状況は第5図に示した通りである。

発見した遺構と遺物は次の通りである。

縄文時代

縄文時代早期・中期・後期土器破片と石器

中期豎穴住居址	3 軒
小 豎 穴	31 基 (遺物が出土しなかった小豎穴も便宜上ここに含めてある)

弥生時代

弥生時代中期土器破片

小 豎 穴	3 基
-------	-----

平安時代

平安時代後期土師器・灰釉陶器破片、鉄製品

後期豎穴住居址	8 軒
---------	-----

近世から現代

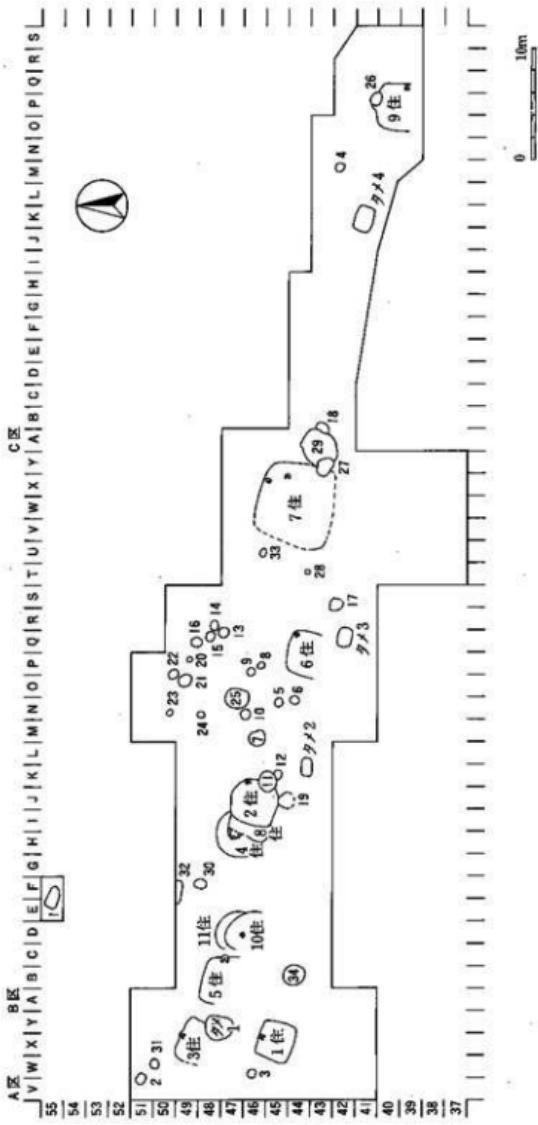
近世～現代タメ跡

4 基

縄文時代の豎穴住居址の1軒は伴出遺物が皆無で、また1軒は小さな土器破片が1点出土しただけであり、明確な帰属時期を示すことはできないが、遺構の在り方から中期に帰属するものと思われる。小豎穴はローム層にしっかりと埋込まれたものが多い。

弥生時代の中期の小豎穴は、ローム層にしっかりと埋込まれた袋状となるものである。

平安時代後期の豎穴住居址は、緩やかな南斜面の日溜まりに展開し、当地方の典型的な集落跡であるが、住居址以外の施設の発見はない。なお、2号住居址と8号住居址が重複していたことから、少なくとも2時期の集落が営まれたものと思う。



第5圖 肾臟脂肪瘤摘除術配圖 (1:500)

表2 長峰遺跡遺構一覧

カッコ付けの数値は推定ないし現存部分を示す

遺構名	時代	遺構の特徴・規模等	出土遺物等
第1号住居址	平安	隅丸方形竪穴住居址 長軸 350cm 短軸 320cm 窓は石組粘土窓で北壁 柱穴なし	
第2住居址	平安	隅丸方形竪穴住居址 長軸 418cm 短軸 396cm 窓は石組粘土窓で東壁 柱穴なし	鉄製品
第3住居址	平安	隅丸方形竪穴住居址 長軸 394cm 短軸 (218) cm 窓は石組粘土窓で北壁 柱 穴なし	
第4住居址	绳文	楕円形竪穴住居址 長軸 444cm 方形切り炬燭状石圓炉 柱穴 4	
第5住居址	平安	隅丸方形竪穴住居址 長軸 422cm 短軸 (250) cm 窓は石組粘土窓で東壁 柱 穴なし	
第6住居址	平安	隅丸方形竪穴住居址 長軸 410cm 短軸 (330) cm 窓は石組粘土窓で東壁 柱 穴なし	
第7住居址	平安	新：隅丸方形竪穴住居址 長軸 682cm 短軸 680cm 窓は石組粘土窓で北壁 旧：周溝でそのプランを確認、隅丸方形竪 穴住居址 窓は東壁	
第8号住居址	平安	隅丸方形竪穴住居址 2号住居址に切られ ている、残存部は少ない 長軸 372cm 短軸 (140) cm 窓は不明 柱穴なし	
第9号住居址	平安	隅丸6角形竪穴住居址？ 長軸 422cm 短軸 348cm 窓は石組粘土窓で東壁 柱穴なし	
第10号住居址	绳文	楕円形竪穴住居址 長軸 410cm 方形石圓 炉	
第11号住居址	绳文	円形ないしは楕円形竪穴住居址 長軸 376cm	
小竪穴群	绳 弥 文 生	34基 袋状となるものが多い	遺物が伴出さ たものは少な い
タメ跡	近代 現代	平面円形と隅丸方形	遺物の発見は 皆無

IV 遺構と遺物

1 繩文時代の遺構と遺物

検出調査した縄文時代の遺構は、住居址3軒と小堅穴31基である。しかし、1軒の住居址からは土器の小破片が1点、1軒は遺物の発見が皆無で、明確な帰属時期は判らない。また、小堅穴の中には、土師器の小破片が出土したものもあり、やはり明確な時期決定ができないものの方が多いし、性格が判明しているものは少ない。ここでは、それら全ての小堅穴を縄文時代と考えておきたい。

小堅穴の調査方法は、自然傾斜ないしは長軸方向で半分の精査を行ない、土層観察をした後に残りの半分の精査を実施した。

なお、カッコ付けの数値は重複ないしは一部を欠損した小堅穴で、現存する部分の大きさを示している。

(1) 住居址

第4号住居址（第5・6図）

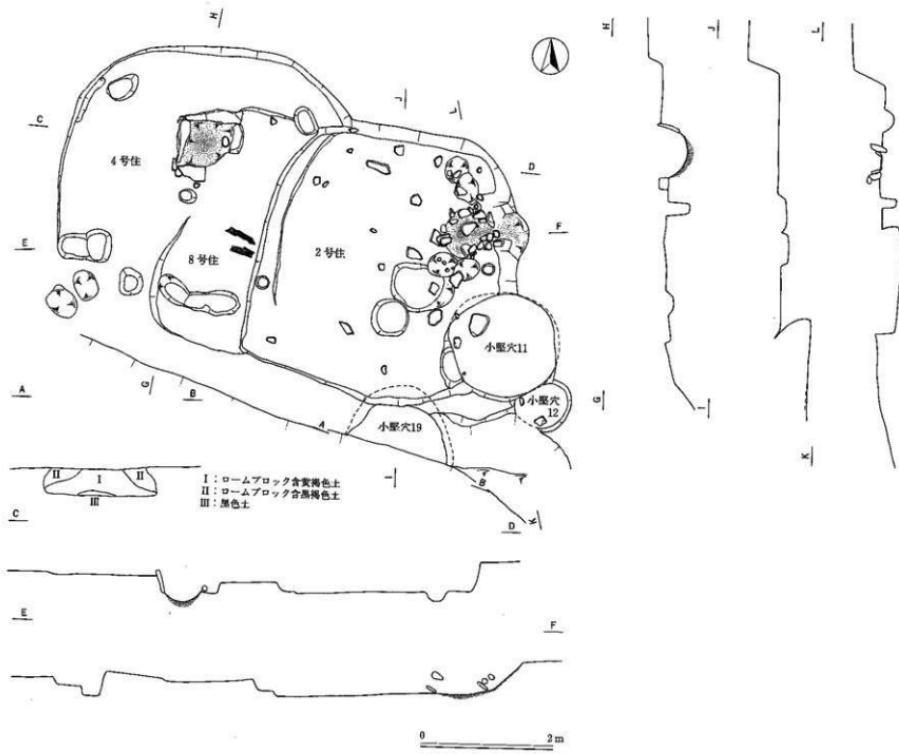
BG-47・48、BH-47・48、BI-48・49の6グリッドに跨る南北に長い楕円形を呈する堅穴住居址である。東側では平安時代の2・8号住居址と重複していた（第5・6図）。新旧関係については本址が旧く、2・8号住居址が新しい。

埋土は、逆三角堆土と三角堆土が発達した自然埋没と考えられるものであった。

堅穴の大きさは長径444cm、短径（310）cmとやや小さい。壁の立上りは普通で、壁高は南が低く北が高くなり3~20cmを計る。床面はほぼ水平で、部分的にはタタキ床も認められたが、総体的には軟弱であった。柱穴は、すっきりしたもので4本である。炉は中央奥壁寄りに方形切り炬燵状石囲炉が構築されていた。重複する8号住居址構築に際しては東側の炉石は抜き取られたと思われる状態で検出された。それは東側の石と焚き口部の石が一部取り除かれている。その範囲は丁度8号住居址の床面範囲と一致する。焚き口部には角柱状の自然石を使い。前記したように東側は抜き取られていたが、北と西は大きな平板石が立てられ、その石と石の間には小さな石が詰められたしっかりしたものである。内径規模は70×60cmで普通である。炉内の焼土は厚い。炉と奥壁のほぼ中間から深鉢1点が発見されている。

発見した土器と石器は少ない。

土器は、深鉢1点で中期後葉の曾利II式である。

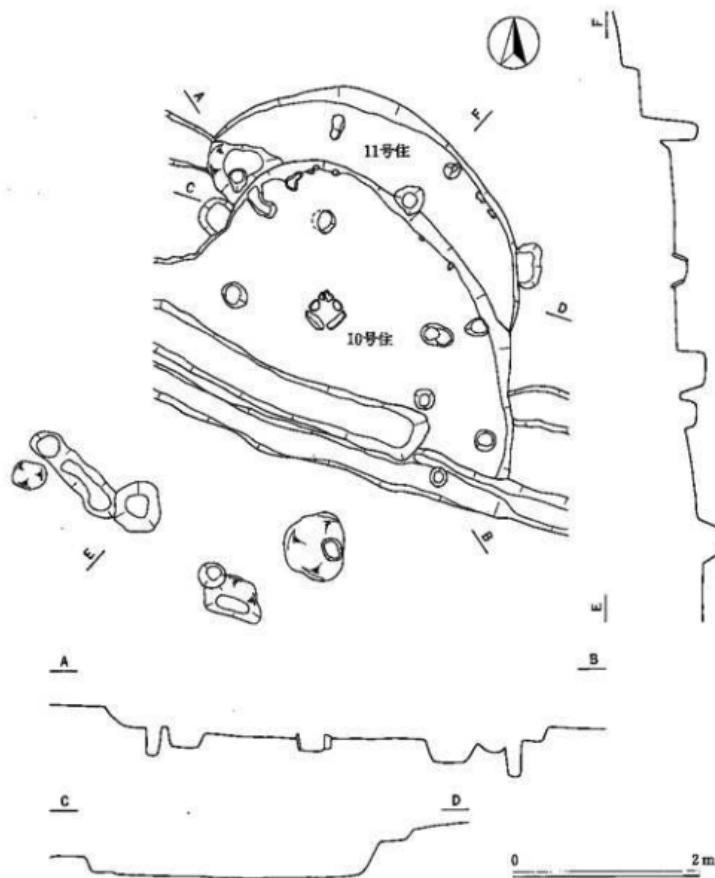


第6図 長峰遺跡第2・4・8号居住実測図 (1:60)

石器は、打製石斧を1点と黒曜石の剝片4点だけである。打製石斧は硬砂岩製の優品である。

第10号住居址 (第5・7・8図)

4号住居址の西方、5号住居址(平安時代)の東方のBC-48、BD-48、BE-47・48の4グリッドに跨る南北に長い楕円形を呈する竪穴住居址であるが、南側は新しい溝で破壊されていてそのプランは明確でない。北側は11号住居址と重複する(第5・7図)。



第7図 長峰遺跡第10・11号住居址実測図 (1:60)

10号住居址の検出時点では、11号住居址の埋没は確認できないまま、10・11号住居址を1軒の竪穴住居址と考え精査を進めた。その途中で11号住居址を確認すると云う調査ミスをしている。新旧関係については、11号住居址の貼床が認められなかつたことから本址の方が新しい。

土層観察ペルトを自然傾斜の南北方向に設定し精査を進めた。その結果、逆三角堆土と三角堆土が発達した自然埋没と考えられるものであった。

竪穴の大きさは長径410cm、短径(230)cmとやや小さい。壁の立上りは普通で、壁高は南が低く北と東が高くなり16~33cmを計る。床面はほぼ水平でタタキ床である。しかし木の根による搅乱が著しくあまり良くない。北西の壁直下には小ピットが並び周溝状の施設とも思われる。深さは6~11cmを計る。柱穴は3本発見されている。その位置関係から本址の主柱穴は4本と思われ、1本は新しい溝によって欠損しているようである。炉はほぼ中央に方形石囲炉が構築されている。小さな平板石を立てたもので内径規模は22×20cmと小さい。焼土はほとんど認められなかった。

遺物の発見は土器と石器がある。

土器は、中期中葉の「平出第III類A」と呼ばれるものの胴部破片と思われるが、小破片であり明確なことは云えない。

石器は、粘版岩製の横刃形石器の破損品1点がある。

第11号住居址 (第5・7図)

10号住居址と重複するが残存部は少ない。BC-48・49、BD-48・49、BE-48の5グリッドに跨る円形ないしは椭円形を呈する竪穴住居址と思われる(第5・7図)。新旧関係については本址が旧く、10号住居址が新しい。

埋土は、逆三角堆土と三角堆土が発達した自然埋没と考えられるものであった。

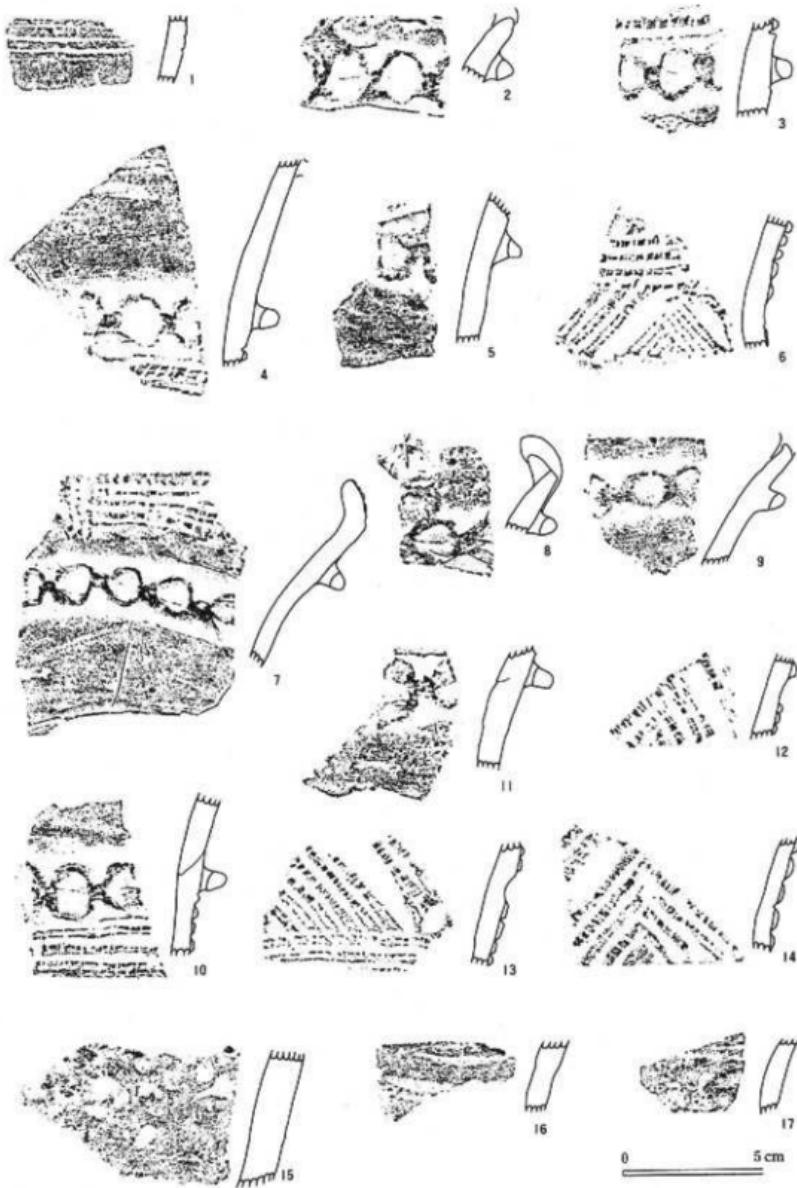
竪穴の大きさは実測図でみると僅かに残存するだけで、明確なことはわからないが、壁の周り方から推測すると径376cm程と思われる。壁高は南が低く東と北が高くなり5~18cmを計る。床面はほぼ水平のタタキ床である。北壁直下には小ピットが並び周溝状の施設と思われる。深さ3~21cmを計る。柱穴と考えられる穴を2個検出した。深さは60cmと65.5cmである。

さて、本住居址の帰属時期については、遺物の発見が皆無で一切判らないが、中期中葉の10号住居址との重複関係で本址が古いことは確認できている。中期中葉より古い時期で、住居址の形態が円形であることからみると、本址は前期の最末ないしは中期初頭となろうか。

(2) 小 竪 穴

小 竪 穴 1 (第5・11図)

北斜面のBE-55、BF-55グリッドで検出調査した。北斜面で発見した遺構は本址だけである。平面形は217×112cmの不整椭円形で、深さ67cmを計る(第5・11図)。



第8図 長峰遺跡第10号住居址、小窓穴9・14出土土器拓影 (1:2)

発見した遺物は、平安時代の土師器 1 点だけで、帰属時期を決めるにはあまりにも小破片すぎる。

小豊穴 2・31 (第 5・18 図)

平安時代の 3 号住居址の北西で検出調査した小豊穴である。小豊穴 2 の平面形は 108×87cm の隅丸方形で、底は平らの深さ 25cm を計る。底から自然石 2 点が出土した。小豊穴 31 は 88×72cm の楕円形を呈し、底は平らで深さ 18cm と浅い。平面形に若干の違いはみられるが、極めて類似する小豊穴である (第 5・18 図)。

小豊穴 2・31 とも遺物の発見は皆無である。

小豊穴 3 (第 5・15 図)

平安時代の 1 号住居址西方の黒色土中で検出調査した。平面形は 92×72cm の楕円形を呈し、底は平らで深さは 27cm である。小豊穴の壁に地山の跡がみられた (第 5・15 図)。

遺物の発見は皆無である。

なお、1 号住居址の北方にある小豊穴状のものは、中からビニール・梅干などが出てきたもので最近のゴミ穴と考えている。本址もこれに似通っていたことから、同様のものであるかもしれない。

小豊穴 4 (第 5・11 図)

平安時代の 9 号住居址の西方、CM-43 グリッドで検出調査した。平面形は 88×79cm の楕円形で、底は平らで深さは 27cm を計る (第 5・11 図)。

遺物の発見は皆無である。

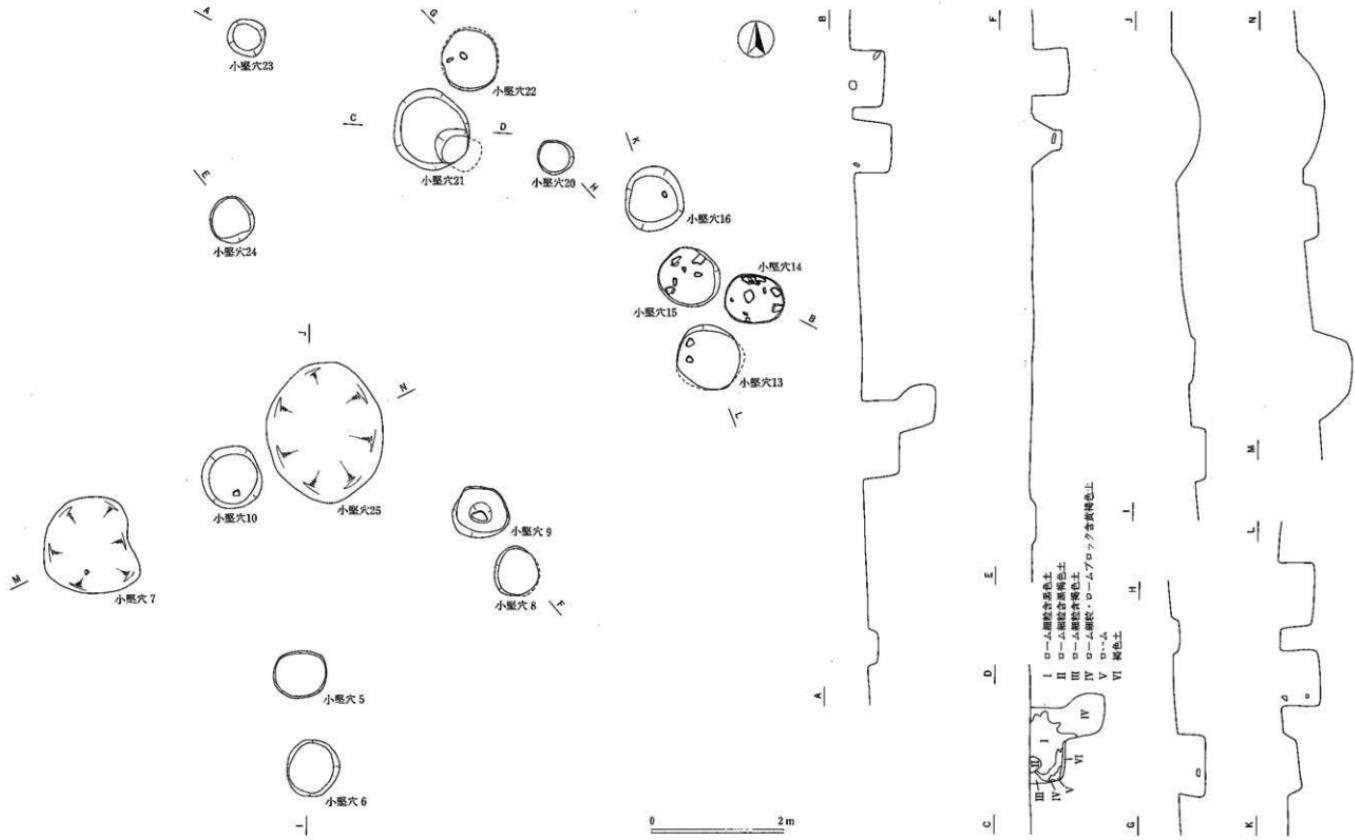
小豊穴 5・6・10・16・20・23・24 (第 5・9・10 図)

尾根上で検出調査した小豊穴 5・6・10・16・20・23・24 の 7 基は、埋土は褐色土と黒褐色土 (小豊穴 10・20) で、平面形は円形ないし楕円形を呈し、底は平らで深さが浅い類似点を持つものである (第 5・9 図)。

平面の大きさは径が 80cm 以上の小豊穴 5・6・10・16 と、径が 70cm 以下の小豊穴 20・23・24 に大別できる。浅いが壁の立上りはしっかりしているが、小豊穴 20 だけではやや良くない。底は平らで小豊穴 5 と 24 はやや凸凹していた。小豊穴 10 は底で自然石 1 点、小豊穴 16 は検出面で自然石 1 点が出土した。

小豊穴 20 は、埋土が他の小豊穴に比べやや黒色が強かったこと、壁の立上りが良くなかったことから考えると、性格が違っていたのかもしれない。

遺物の発見は、小豊穴 6 から凹石の破損品が 1 点。小豊穴 16 から縄文時代の土器破片 1 点 (第



第9図 長峰遺跡小窓穴 5~10・13~16・20~25実測図 (1:60)

10図8)、凹石1点、ホルンフェルス製の打製石斧1点は、縦に割れたもので幅1cm前後が残っているだけである。小豊穴23から石鐵1点と黒曜石の剝片1点がある。小豊穴5・20・24は遺物の発見は皆無である。

小豊穴8・13・14・15・22 (第5・9・8・10図)

尾根上で検出調査した小豊穴8・13・14・15・22の5基は、平面形は円形ないしは橢円形を呈し、底は平らで深い類似点を持つものである(第5・9図)。

平面の大きさは小豊穴8が一番小さく74×68cmを計る他は径90cm前後である。深さは小豊穴22が一番浅く42cm、小豊穴15が一番深く60cmを計る。壁の立上りは良好で、小豊穴8は東壁が、小豊穴13は東と南壁が、小豊穴15は北壁が、小豊穴22は東・西・北壁がそれぞれオーバーハングする「袋状」を呈するものである。埋土中には開口部(検出面)が崩落したと思われる多量のロームが包含されていたことからみて、当時の開口部はもっと狭かったものであろう。

小豊穴13は検出面で自然石1点、小豊穴22は底近くで自然石2点が出土した。小豊穴14と15は検出面から底面にかけて自然石が出土したが、石のあり方には法則性や規格性はみられなかった。

遺物の発見は、小豊穴8から黒曜石の剝片1点。小豊穴13から黒曜石の剝片2点。小豊穴14から縄文時代前期末の土器破片25点(第8図7~17、10図1~6)、ホルンフェルス製の打製石斧1点は刃部側を欠損し残存部は少ない。小豊穴15から縄文時代の土器破片1点(第10図7)がある。小豊穴22は遺物の発見は皆無である。

小豊穴7・25 (第5・9図)

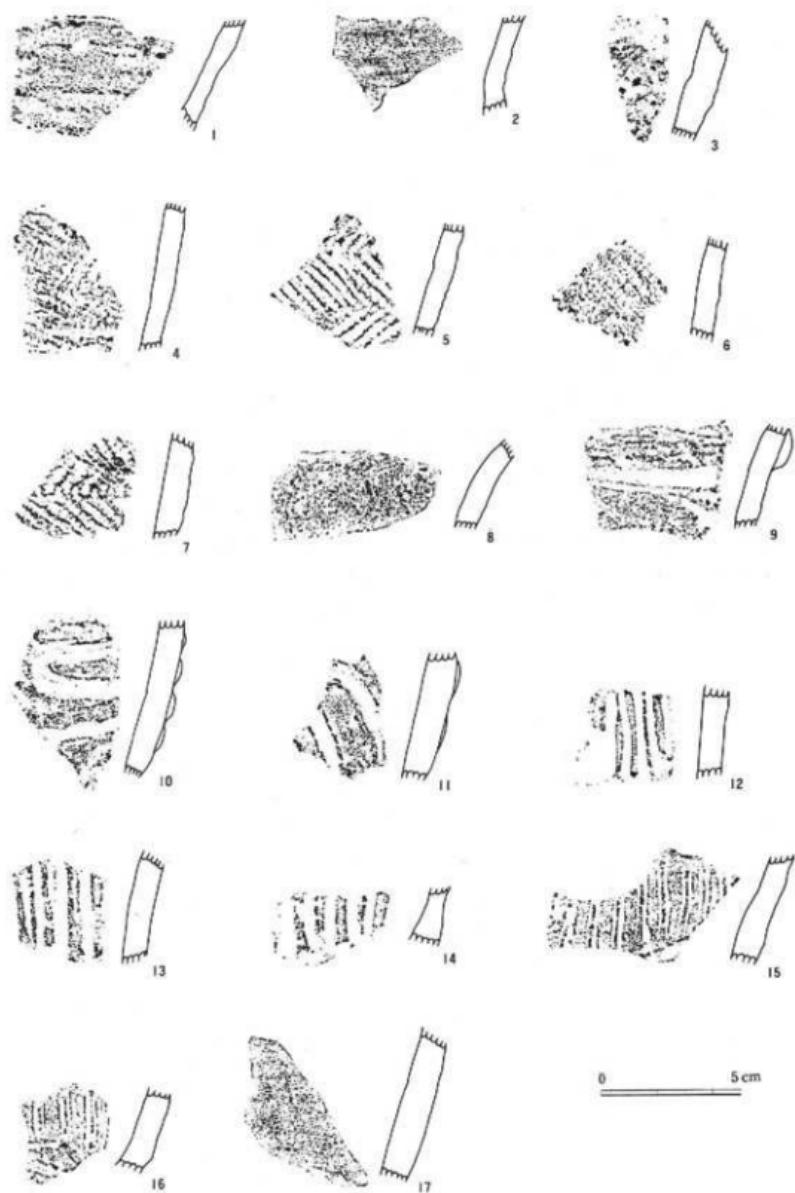
尾根上で検出調査した。平面形は円形ないしは橢円形を呈し、すり鉢状に落ち込むロームマウンドと同様なものである。底は丸底で壁はだらだらと立上り凸凹が著しい(第5・9図)。

遺物は、小豊穴25から粘板岩製の打製石斧と思われる破損品1点を発見している。形態は打製石斧であるが、厚みがあり土掘り具としての機能が果たせたか疑問である。小豊穴7は遺物の発見は皆無である。

小豊穴8 (第5・9・8図)

尾根上で検出調査した。平面形は88×76cmの円形である。壁は底側の3分の1ぐらいがほぼ垂直に立上り、その上で「く」の字状に屈折しラッパ状に立ち上がる。底はやや丸みをもつもので深さ46cmである。壁が屈折する付近から自然石1点が出土した(第5・9図)。

発見した遺物は、縄文時代前期末の土器破片5点(第8図2~9)と、黒曜石の剝片1点である。



第10図 長峰遺跡小堅穴14~16・29出土土器拓影 (1:2)

小豊穴21 (第5・9図)

尾根上で検出調査した。平面形は126×116cmの円形で、底面に子ビット1個が設けられていた。壁はほぼ垂直に立上り良好で底は平らで深さ57cm。底面の南東に穿たれた子ビットは、その開口部の径51cm深さ57cmで、検出面から深さは114cmを計る。子ビットの壁は、北西側はほぼ垂直に立上がりっているが、南東側はオーバーハングし「袋状」となっている(第5・9図)。

発見した遺物は、黒曜石の剝片1点である。

小豊穴17 (第5・21図)

尾根肩部にあたるBR-43・44、BS-43・44グリッドで検出調査した。南半分位は畠地を平坦化するための削平で欠損している。平面形は(120)×110cmの梢円形で深さ71.5cmである。底面は水平で(128)×132cmを計り、その形態開口部(検出面)より底面が広がった「袋状」を呈し、壁はきれいにオーバーハングしている。それは東壁は21cm、西壁は5cm、北壁が13cm広い(第5・21図)。それでも埋土中には多量のロームがみられ、開口部の崩落が容易に考えられるもので、当時の開口部はもっと小さかったようである。

遺物の発見は黒曜石の剝片4点である。黒曜石が出土してはいるが、小豊穴は尾根の肩部からの発見で、これは弥生時代の小豊穴11・12・19と同じであるし、小豊穴の形態も極めて似通っていることから考えると、本址も弥生時代の小豊穴である可能性が高くなる。弥生時代の遺物が発見できなかったことからここに記載した。

小豊穴18・27・29 (第5・23・10図)

平安時代の7号住居址の東で検出調査した。小豊穴27は7号住居址と重複し、新旧関係は7号住居址が新しく、本址が古い。小豊穴18・27・29も重複しているが、検出面で搅乱が著しく一遺構と考え精査を進めたから、新旧関係を明確にすることはできなかった。

小豊穴18の平面形は(86)×108cmの梢円形で、底は平らで深さ25cmである。小豊穴27の平面形は(127)×(133)cmの不整梢円形で、底は平らで深さ58cmである。小豊穴18・小豊穴27とも壁の立上りはあまり良くない。小豊穴29は搅乱が著しく、地主さんが以前にこの辺りはドームを掘り採ったことがあると聞いていたため、その穴とも考えてみたが土器破片等の発見があり、明確な性格付けはできなかった。平面形は(342)×307cmの不整梢円形で、底面は2個所ありそれぞれ平である。(第5・23図)。壁はだらだらと立上りロームマウンドの状態に似ている。

遺物の発見は、小豊穴27から縄文時代土器破片1点、凹石1点、黒曜石の剝片2点、平安時代の土師器破片1点、小豊穴29から縄文時代中期の土器破片15点(第10図9~17)、平安時代の土師器破片5点、須恵器破片3点がある。

小竪穴 28 (第5・25図)

平安時代の9号住居址と重複して検出された。新旧関係については本址が旧く、9号住居址が新しい。

平面形は118×90cmの隅丸方形で、壁と底には地山の礫がみられた。北壁はほぼ垂直に立上り良好で、東・南・西壁はなだらかになる。底は平らで深さ44cmである(第5・25図)。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴 28・33 (第5・23図)

平安時代の7号住居址西の、BT-45グリッドで小竪穴28を、BU-47グリッドで小竪穴33を検出調査した。

小竪穴28の平面形は44×42cmの円形である。小竪穴33は71×60cmの隅丸方形で、底は平らで深さ12cmと浅い(第5・23図)。

小竪穴28・33とも遺物の発見は皆無である。

小竪穴 30 (第5・11図)

4号住居址の西北方、BF-49・50グリッドで検出調査した。平面形は100×78cmの隅丸方形で、底は平で深さ45.5cmを計る(第5・11図)。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴 32 (第5・11図)

4号住居址の西北方、BE-50・BF-50グリッドで検出調査した。平面形は(213)×(58)cmで橢円形になるものと思われる。深さ31.5cmを計る(第5・11図)。南側半分位を調査しただけで明確なことは判らないが、形態は小竪穴1に似ている。

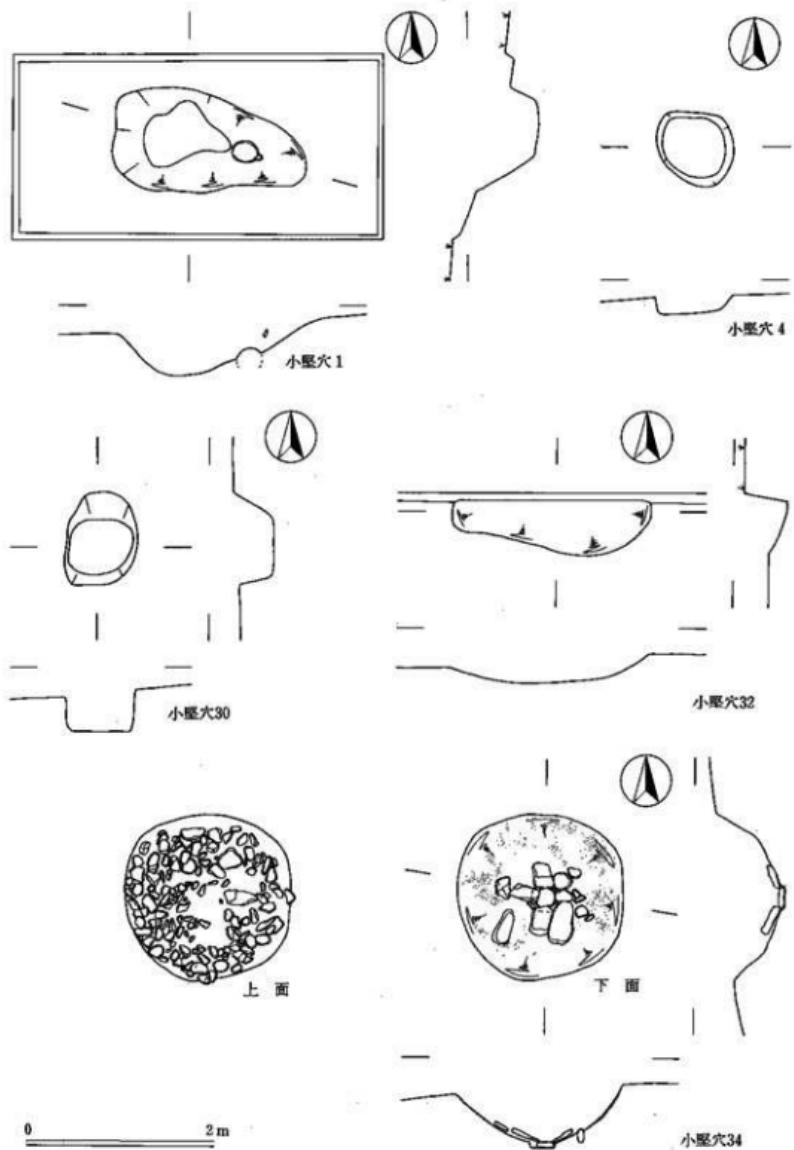
遺物の発見は皆無である。

小竪穴 34 (第5・11図)

平安時代の1号住居址の東方、BB-45・46グリッドで検出調査した。平面形は180×178cmの円形で、すり鉢状に落ち込み深さ75cmである。

小竪穴に伴う集石は、当地方で産出する安山岩を用いたもので、実測図上面図でみるとその平面形は円形を呈し真中は落ち込んだ状態であった。また、集石は西壁側に片寄っていたが、付近に石が散乱した様子はみられず良好な状態で遺存していた。

集石は、ローム層まで掘り込んだり鉢状の小竪穴内に炭化物混りの真黒色土とともに入っていったが、石の大きさは子供の握り拳から頭大よりも大きなもので、大きさには規格性はみられなかった。強いて云うならば大人が片手で容易に持つことのできるものが多い。集石を取り除くと



第11図 長峰遺跡小堀穴 1・4・30・32・34実測図 (1:60)

実測図下面図でみるように、大きな平石が、底面に埋めこんだような状態で敷きつめられていた。それらの石の上面は、小豊穴の形状と同様ですり鉢状の面をつくっている。壁の一部が焼けている（第5・11図）。

遺物の発見は皆無である。

（3） 遺構に伴わない遺物（第14・13図）

遺構に伴わない資料は、土器と石器があるがあまり多くない。

土器は、早期、前期、中期、後期のものがある（第14・13図）。全て小破片で器形が復原できるものではない。

石器は、打製石斧3点・横刃形石器2点・凹石と磨石7点・石製円盤1点・石鏃8点がある。

打製石斧は完形品が1点と破損品が2点あり、完形品は硬砂岩製。破損品は結晶片岩製で、基部がわずかに残存するものと、基部を僅かに欠損するものがある。横刃形石器は破損品は2点あり、網雲母変岩と結晶片岩製である。横刃形石器なのか打製石斧なのか判別できない粘板岩製のもの1点もある。石製円盤は鉄平石を円形に打ち欠いたもので、石鏃は無茎鏃2点と有茎鏃6点である。

2 弥生時代の遺構と遺物

検出調査した弥生時代の遺構は小豊穴3基だけで（表3）、遺物はわずかな土器がある。

調査した小豊穴の中で、遺物が伴出したものは少なく、多くの小豊穴は帰属時期が示せないまま、単純に弥生土器が出土した3基の小豊穴だけを弥生時代としたことに問題点を残している。

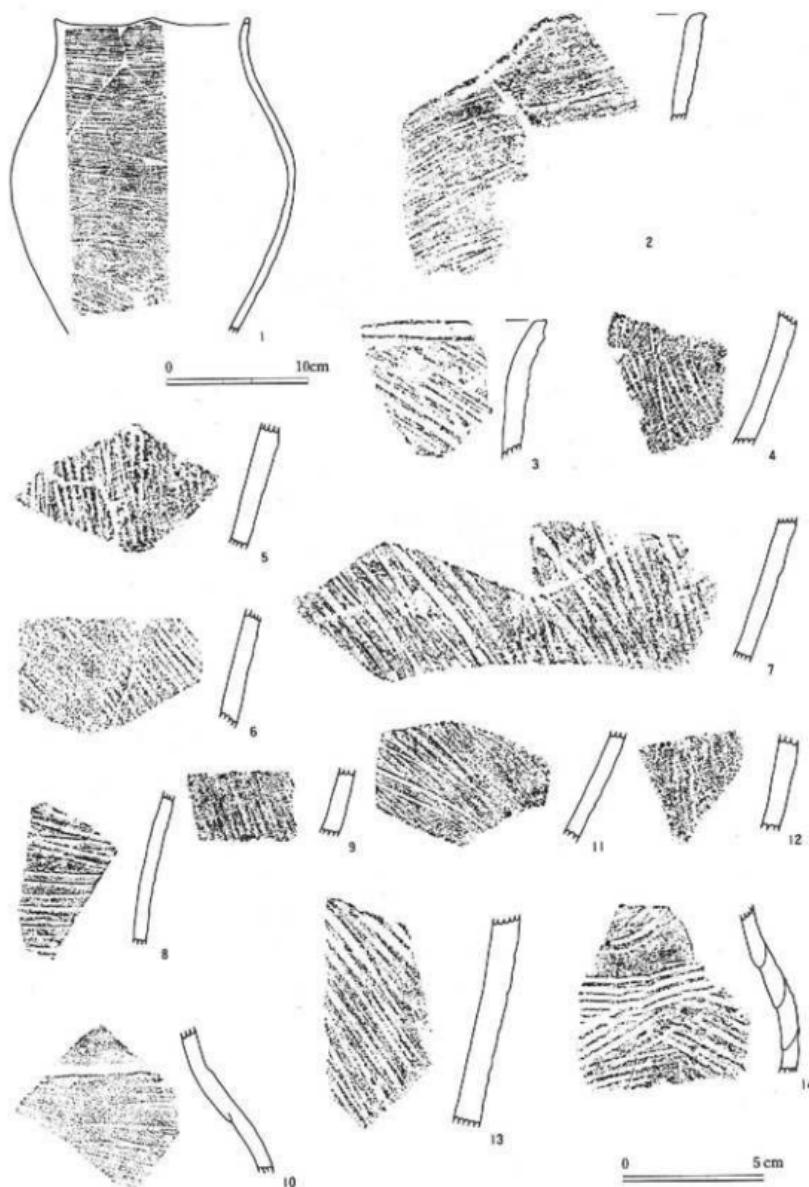
（1） 小 豊 穴

小豊穴11（第5・6・12図）

尾根の肩部にあたるBJ-46、BJ-47、BK-46、BK-47グリッドで、平安時代の2号住居址と弥生時代の小豊穴12と重複していた。2号住居址との新旧関係については、本址が旧く、2号住居址が新しい。小豊穴12との新旧関係については明確にすることはできなかった。

平面形は160×(160)cmの円形である。埋土の上面は黒色土で、逆三角堆土と三角堆土の発達が見られた自然埋没によるもので、底面直上は真黒色土で、その真黒色土中から小豊穴の底面に密着する状態で、外面を上にした第12図1の土器が出土している。

小豊穴はローム層に掘り込まれたもので、壁面、底面ともしっかりしている。底面はほぼ水平で170×170cmを計り、その形態は開口部（検出面）より底面が広がった「袋状」を呈し、壁は東



第12図 長峰遺跡小堅穴11・12・19、遺構外出土土器拓影 1 (1:4) 2~14 (1:2)



第13図 長峰遺跡遺構外出土土器拓影 (1:2)

から北にかけてきれいにオーバーハングしている。これは当時に近い形態を保っているものと思われるが、埋土中に、開口部が崩落したと思われるロームブロックもみられたことから、当時の開口部はもっと小さかったものと思われる。深さ74cmを計る（第5・6図）。

遺物は土器がある。条痕が施されたものと無文土器で、第12図1～7の7点を示した。1は6分の1位が残存する壺で、口縁部に4単位の山形突起をもつものと思われ、頸部はくびれている。2は平安時代の1号住居址から出土した2点の破片と接合した壺の口縁部であり、比較的大きな山形突起をもつものである。なお、本址と1号住居址は23cmも離れている。3は壺の口縁部破片、4～7は胴部破片で条痕が施されている。

小竪穴12（第5・6・12図）

尾根の肩部にあたるBK-46グリッドで、弥生時代の小竪穴11と重複して検出されたが、小竪穴11で記したように新旧関係は明確にできなかった。

平面形は(82)×(79)cmの梢円形を呈する。南側は削平されているが、これは遺跡の位置と自然環境で述べたように、畑地も平坦化する折に行なわれたものである。埋土は黒色土の自然埋没によるもので、底面近くには12×7cmと12×16cmの自然石が据え置かれていた。壁はほぼ垂直に立ち上り、底は平らで深さ34cmを計る（第5・6図）。

遺物は土器がある。小破片ばかり6点を数えるが、5点には条痕が施されている。その中で比較的大きい破片2点を図示した。第12図8と9とも壺の胴部破片である。小破片のため図示できなかっ無文土器1点は、内面に赤色顔料の塗布がみられる。

小竪穴13（第5・6・12図）

尾根の肩部にあたるBJ-45・46グリッドで検出調査した。南半分位は畑地を平坦化する削平で欠損している。

平面形は154×(68)cmの円形ないし梢円形で、深さは47cmである。底面はほぼ水平で169×(98)cmを計り、その形態は開口部（検出面）より底面が広がった「袋状」を呈し、壁はきれいにオーバーハングしている。それは東壁が9cm、西壁が15cm、北壁は30cmも広くなっている（第5・6図）。それでも埋土中には多量のロームがみられ、開口部の崩落は容易に考えられるものであり、当時の開口部はもっと小さかったようである。

発見した遺物は土器と石器があるが、それは縄文時代中期中葉の土器破片3点（第14図12・13）、黒曜石の剝片9点、弥生時代の土器破片1点（第12図10）は壺の頸部破片であろう。平安時代の土師器破片2点もある。

発見した土器は縄文時代、弥生時代、平安時代で、小竪穴の帰属時期を明確にすることはできないが、本址は弥生時代の小竪穴11と12に隣接する上に、その形態と埋土が極めて似ている点からみて、弥生時代の小竪穴と考えておきたい。



第14図 長峰遺跡小堅穴19、遺構外出土土器拓影 (1:2)

(2) 遺構に伴わない遺物 (第12図)

遺構に伴わない資料は僅かな土器がある。第12図14は壺の頸部破片、11~13は甕の胴部破片で条痕が施されている。なお、12と13は平安時代の2号住居址出土である。平安時代の8号住居址からも小破片が出土しているが図示していない。

3 平安時代の遺構と遺物

検出調査した平安時代の遺構は住居址8軒あり、2号住居址と8号住居址は重複していたことから、少なくとも2時期にわたる集落が考えられる。

(1) 住居址

第1号住居址 (第5・15・16図)

AW-45~47、AX-45~47、AY-45~47の9グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址である(第5・15図)。

AX-46グリッドの調査で、床面を検出したことにより住居址の埋没を確認し、AX-46グリッドがあまりにも住居址の真中に位置してしまい、土層観察ベルトを設定することができなかった。そこでグリッド掘りの壁観察をすると、埋土は逆三角堆土と三角堆土が発達した自然埋没と考えられるものであった。

竪穴の大きさは東西350cm、南北320cmとやや小さい。壁の立上りは普通であるが、黒色土中に構築されていたこともあり、やや不明瞭な個所もみられた。壁高は北と東が高く南と西は低くなる。それぞれの高さは東壁が20cm、西壁9cm、南壁6cm、北壁は25cmを計る。床面はほぼ水平で、竈の南側には幅100~140cmの貼床が認められた。しかし、その貼床は比較的軟弱であったし、西南隅付近は黒色土の床で極めて軟弱なものでありあまり良くない。柱穴は発見できなかつたが、竈の東隣りで2個のピットを検出した。その位置関係からみて灰だめの穴と考えられる。

竈は北壁の中央に石組粘土カマドがある。石の多くは抜き取られたり崩れたりで、原形をとどめている石は少なかった。焚口部に大きな平板石を据え置いたような状態で出土した。この石は焚口部の施設であったのか、それとも天井石が落ちたものか明確にすることはできなかつた。石は全て当地方で産出する安山岩である。竈内の焼土の厚さは4cmを計る。

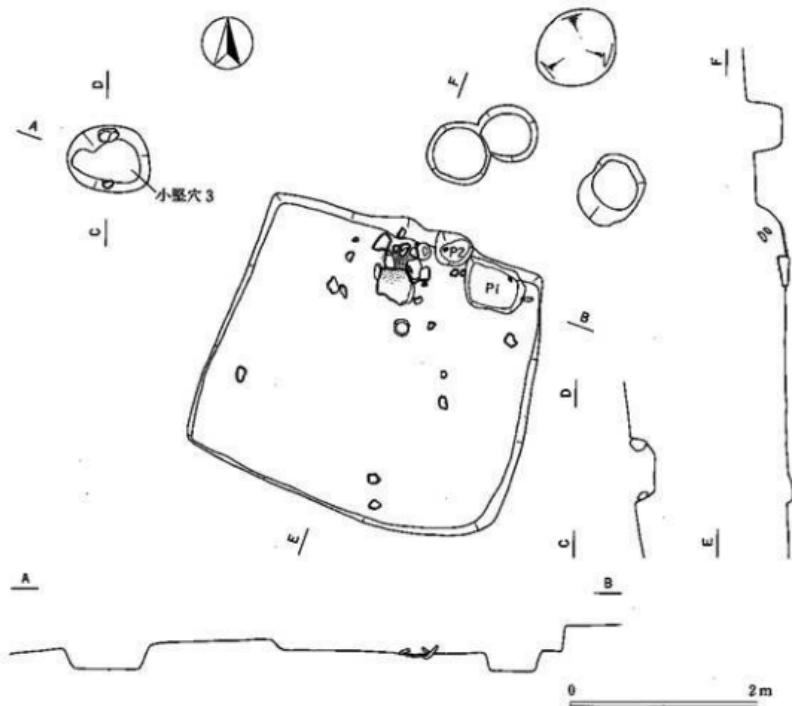
発見した土器は少ないが土師器・須恵器・灰釉陶器がある。

土師器は壺・壷・鉢がある。壺は小破片が多く、第16図1も小破片から器形を復原したものである。このほかに図示できなかつたが、底部に糸切痕のみられるもの、高台の付けられたもの、

内面黒色研磨されたものがある。甕は小形のものと大形のものがみられ、3は小形の甕で4分の1位が残存している。外面の口縁部近くに炭化物の付着がみられる。大形の甕と錫蓋は小破片ばかりで器形を復原できるものではない。

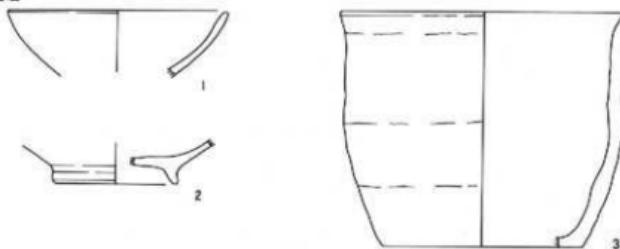
須恵器は大形甕の小破片2点で、器形を復原できるものではない。

灰釉陶器は、小破片をわずかに発見しただけで、2は小破片から器形を復原したものである。

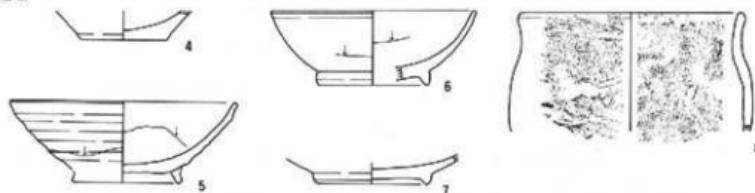


第15図 長峰遺跡第1号住居址、小堅穴3実測図 (1:60)

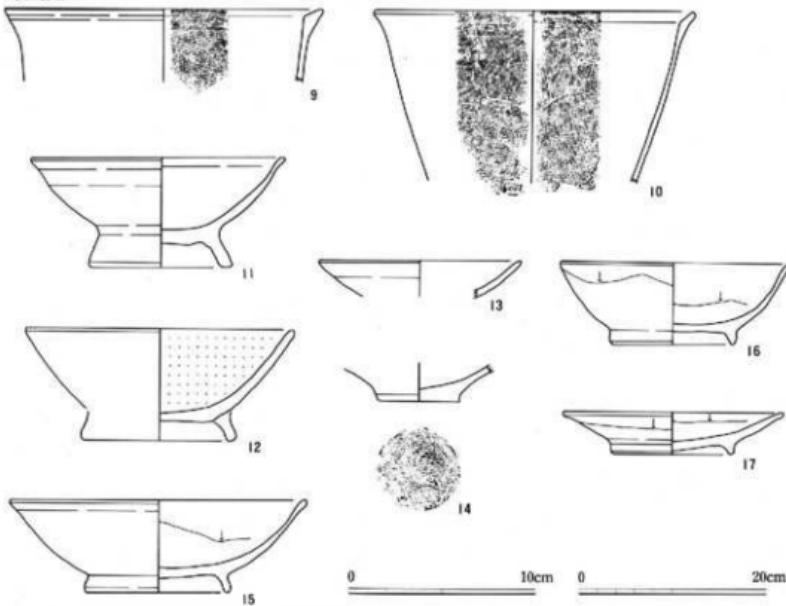
1号住居址



2号住居址



3号住居址



第16図 長峰遺跡第1・2・3号住居址出土土器実測図 1～7、11～17 (1:3) 8～10 (1:6)

第2号住居址（第5・6・16・17図）

1号住居址の東方、BI-47・48、BJ-47・48、BK-47・48の6グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址で、西側は縄文時代の4号住居址、平安時代の8号住居址と重複し、東南隅では弥生時代の小竪穴11と重複していた（第5・6図）。その新旧関係については、本址が一番新しい。なお、8号住居址との重複については、検出した時点においては本址と8号住居址は1軒の竪穴と考え精査を進めた。調査結果からみると土層観察ベルトを丁度2号住居址の西壁上に設定し、精査をすると云う不手際を行なっているが、2号住居址の精査では貼床は認められなかっただし、土層観察ベルトでも床面を認めることができなかつたことから、本址の方が新しいことを確信している。また、南壁の多くは削平されていたが、これは遺跡の位置と自然環境で述べたように、畑地を平坦化する折に行なわれたものと思われる。埋土は前記したように土層観察ベルトを西壁際に残したこともあり、適確な観察はできなかつたが、逆三角堆土と三角堆土が発達した自然埋没と考えられるものである。

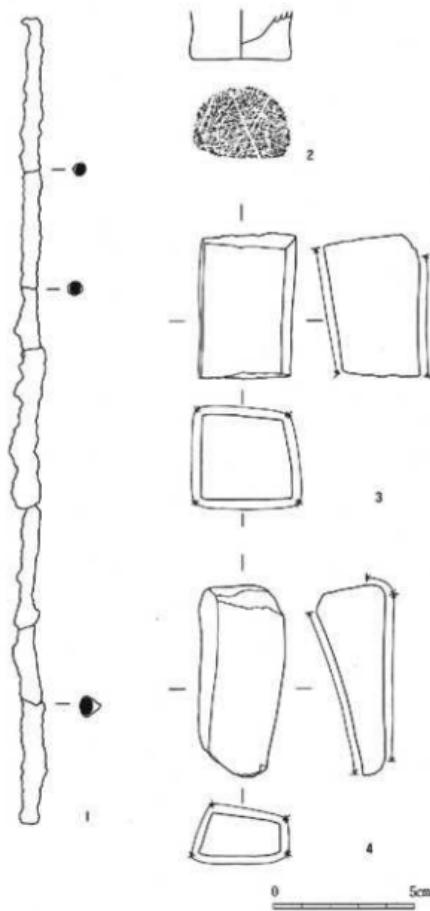
竪穴の大きさは東西396cm、南北418cmを計り、壁はほぼ垂直に立上り普通である。壁高は東と北が高く南と西が低くなる。それぞれの高さは東壁が45cm、西壁は（15）cm、南壁は（10）cm、北壁は48cmを計る。西壁は8号住居址との重複で低くなっているし、南壁は削平されている。床面は堅いタタキ床であるが凸凹が著しい。また、西壁下にみられる周溝より壁際の床面は一段高くなっている。明確に柱穴と思われるものは発見できなかつたが、大小さまざまなピットを検出している。されば竪近くにあることから、竪との関係が考えられるものである。

竪は東壁の中央より北にかたよった位置にある。石組粘土カマドであるが、原型をとどめていたのは壁際の袖石だけで、遺存状態は悪くまわりに散乱していた石が竪石と思われる。しかし、その数は少なく抜き取られたものもあるようである。石は全て当地方で産出する安山岩である。竪内の焼土の厚さは7cmで、煙道部分もしっかり焼けていた。

発見した遺物は少ないが土器・鉄製品・土製品・石製品がある。

土器は土師器と灰釉陶器で、土師器は壺と甕がある。壺は小破片ばかりで第16図4も小破片から器形を復原したもので糸切り底である。このほかに図示できなかつたが、底部に糸切痕がみられるもの、高台の付けられたもの、内面黒色研磨されたものがある。甕は小形のものと大形のものがみられ、8は小形の甕で残存部は少ない。内・外面とも炭化物の付着がみられ、内面口縁近くの炭化物は厚くボロボロと落ちる。9と10は大形の甕で、9は小破片から器形を復原したもので、内・外面ともわずかであるが炭化物が付着がみられる。甕内からの出土である。10は4分の1位が残存するもので、やはり内・外面とも炭化物が付着し、外面の炭化物は口縁部近くである。

灰釉陶器は5～7の3点で、5と6は碗で、5の高台は剥落している。7は皿であろう。5と7の底部には糸切痕が残り、高台は糸切後に付けられたものである。なお、6と7は破片から器形を復原したものである。



第17図 長峰遺跡第2号住居址、遺構外出土土製品・鉄製品・石製品実測図 (1:2)
(1～3 2号住居址、4 遺構外)

鉄製品第17図1は、長さ28.7cmの丸棒で径は0.4~0.6cmを計り、紡錘車の軸棒と思われるが、鋸が著しく、明確なことは判らない。片側（実測図上側）の先端は折れ曲げられているように見える。糸に燃りをかけるための鉤であろうか。

土製品第17図2は、底部が残存するミニチュア土器で、広葉樹を用いた木葉底である。

石製品第17図3は、砥石の破損品1点で泥岩製である。砥石を発見したが、研ぐ対象である利器の発見はない。

第3号住居址（第5・18・16図）

1号住居址の北方、AW-49・50、AX-49・50、AY-49・50の6グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址で、東側は近世が現代のタメ1と重複していた（第5・18図）。その新旧関係については、本址が旧く、タメ1が新しい。住居址の南側の自然傾斜と、新しい溝によって破壊されている。

土層観察ベルトを南北方向に設定し精査を行なった。その結果、埋土は逆三角堆土と三角堆土が発達した自然埋没と考えられるものであった。

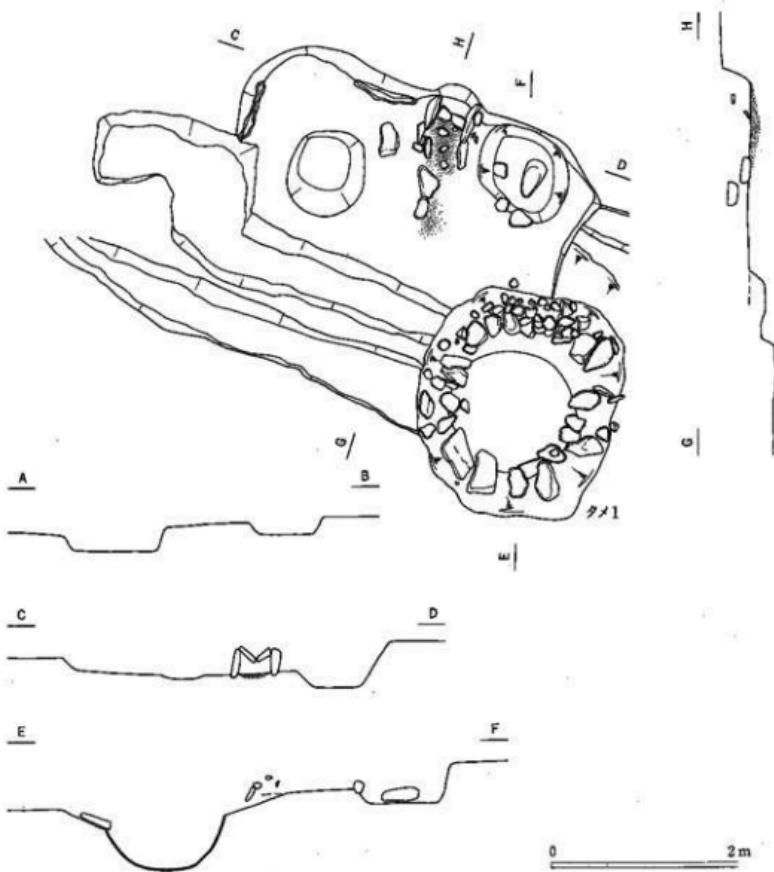
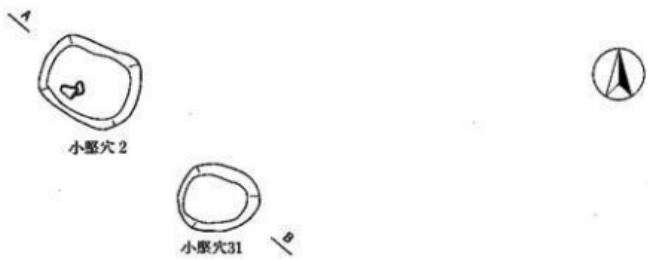
竪穴の大きさは東西394cm、南北(218)cmを計り、北壁と西壁は東壁に比べるとややなだらかとなり、壁土は崩落しているようである。壁高は東と北が高く西が低くなる。それぞれの高さは東壁が34cm、西壁は13cm、北壁が26cmである。床面は堅いタタキ床でほぼ水平である。柱穴は発見できなかったが、比較的大きなピットを竪の東隣と南西側で検出した。竪の東隣のピットは、その位置関係からみて灰だめの穴と考えられる。南西側のピットは深さは23cmを計り、埋土中には炭化物が多く混じっていたし、底面近くからは焼土を発見している。しかし、焼土は後に持ち込まれたものであり、このピットも灰だめの穴と考えられるが、その位置関係からみるとすつきりしない。周溝が北壁直下と西壁直下で部分的に認める。深さ3cm前後と浅いものである。

竪は北壁の中央に石組粘土竪である。平石を立てた袖石は原形をとどめていたし、天井石も真中で割れ竪内に落ち込んではいたが、その遺存状態は良い。竪近くに散乱する石は竪石が崩れたものと思われる。石は全て当地方で産出する安山岩である。竪内の焼土は厚く9cmを計る。

発見した土器は少ないが土師器と灰釉陶器がある。

土師器は壺と甕で、壺は第16図11~14点で、11と12は高台壺で、11の内面には炭化物の付着がみられる。12は内面黒色研磨されたもので、高台は剥落するが、底部に糸切痕が残っている。13は小破片から器形を復原したもので、14は糸切痕の残る底部破片で、内面には漆と思われる黒色の付着物がみられる。甕は小破片ばかりで器形を復原できるものではない。

灰釉陶器は15~17の3点で、15と16は碗で、15は3分の2位が残存し、16は完形品。17は皿である。



第18図 長峰遺跡第3号住居址、小堅穴2・31、タメ1実測図 (1:60)

第5号住居址 (第5・19・20図)

1号住居址の北、3号住居址の東に位置するBA-49、BB-48・49、BC-48・49の5グリッドに跨る隅丸方形を対する竪穴住居址である。南側は自然の傾斜と、新しい溝によって破壊されている。また、西壁の南寄りでは竪穴状の掘り込みと重複していた(第5・19図)。竪穴状建場は東西198cm、南北(71)cmの隅丸方形を呈する。新旧関係については本址が古い。なお、竪穴状の掘り込みからは遺物の発見は皆無で、性格については判っていない。

土層観察ペルトを自然傾斜の南北方向に設定し精査を行なった。その結果、埋土は逆三角堆土と三角堆土が発達した自然埋没と考えられるものであった。埋土中には多量の焼土が混じっていた。

竪穴の大きさは東西422cm、南北(250)cmを計り、壁はほぼ垂直に立上りしっかりとていたが、東壁は竈より南側はやや不明瞭であり良くない。壁高は東と北が高く西が低くなる。それでの高さは東と北壁が35cm、西壁は16cmを計る。床面は堅いタタキ床でほぼ水平である。検出位置から柱穴と思われる穴はあるが、柱穴と明確に判ったものではない。それはP1、P5~P9の6本で、P1は長径73cm深さ33cm、P5は長径67cm深さ15cmと浅く、P6は長径(91)cm深さ17cmとやはり浅い、P7~P9は上面を溝によって欠損するが、P7は径65cm深さ9cmで、住居址の床面を水平と想定すると深さ39cm、P8は径55cm深さ24cmで、やはり水平床面を想定すると深さ42cmと深い。P9は径66cm深さ18.5cmで、やはり水平床面を想定する深さ35cmをそれぞれ計るが、深さは15cmから(42)cmとあまりにも不揃いである上に、主柱を4本と考えると、柱穴が東南隅で発見できないという問題を残している。柱穴以外ではP3が竈南側に位置し、その位置関係から灰だめの穴と考えられる。竈前面の住居ほぼ真中のP8は浅いすり鉢状のもので、数多い小石が出土しているが性格は不明である。P2は上面にロームの貼床が認められた。貼床の下から甕の口縁部破片第20図7が出土した。なお、P1の上面付近の広い範囲では比較的厚い焼土が認められ、火災によって廃絶した家であるのかもしれない。

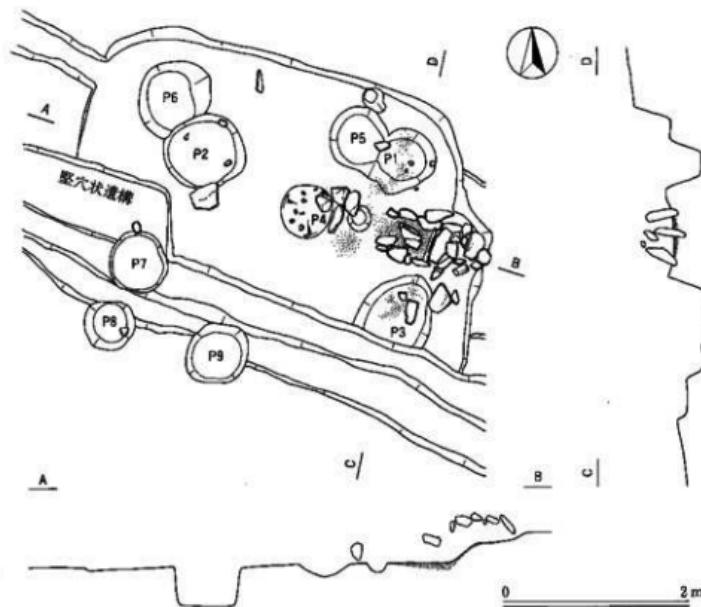
竈は残存する東壁のほぼ真中に位置していた。したがって欠損する壁を考慮すると、東壁中央より北寄りに構築されていたことになる。石組粘土竈で、煙道部分が長く造られていたが、袖石・天井石とともにその遺存状態は極めて良好で、部分的には灰白色の粘土もみられた。北側から見ると丁度竈の所で壁は屈折し煙道部分も竪穴内に入っている。竈内の焼土は厚さ5.5cmを計る。

発見した土器は土師器と灰釉陶器がある。

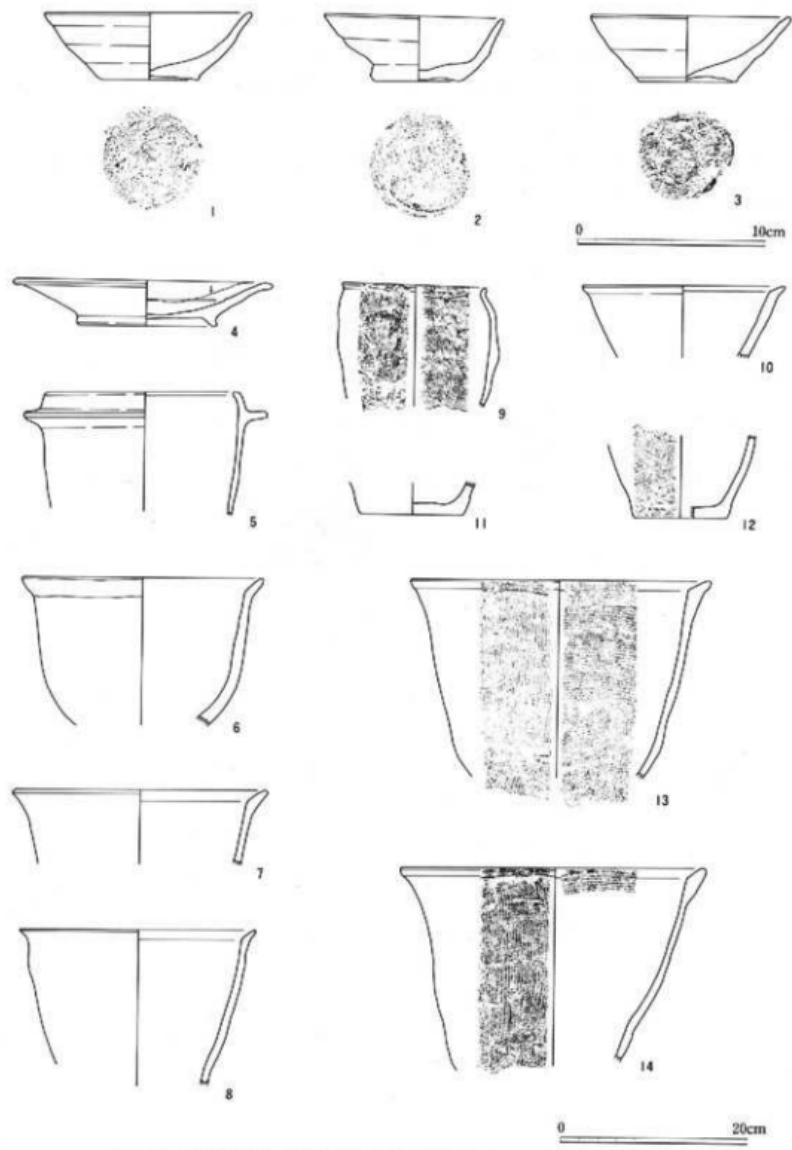
土師器は壺・鍔釜・甕がある。壺の第20図1~3の3点は、歪みが著しいものばかりで底面には糸切り痕が残る。1と2の内面にはわずかではあるが炭化物の付着がみられる。鍔釜は5で、胴下半を欠損するが6号住居址出土の破片1点が接合した。整形は粗雑で口唇部は平らではなく、蓋を乗せるには不便な状態のものである。なお、本址と6号住居址は30m離れている。図示できなかったが鍔釜の鍔部破片があり、それは8号住居址出土破片と接合した。本址と8号住居址は

14m離れている。甕は6～14の9点で、6はP3から出土した破片から器形を復原し、7はP2から出土した小破片から器形を復原した。8～12・14の6点は竈内から出土した。10は内面に、8・9・14の3点は内・外面に炭化物の付着がみられ、外面は口縁部付近への付着である。11は広葉樹を用いた木葉底である。13は破片から器形復原したものである。

灰釉陶器は4の段皿の完形品である。この他には小破片が僅かにあるだけで、土師器の出土量が比較的多かったのに比べ灰釉陶器は少ない。



第19図 長峰遺跡第5号住居址実測図 (1:60)



第20図 長峰遺跡第5号住居址出土土器実測図 1～4 (1:3) 5～14 (1:6)

第6号住居址 (第5・21・22図)

2号住居址の東方、BO-44・45、BQ-44・45、BP-44・45の6グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址で、南側は畠地を平坦化するための削平で欠損している(第5・21図)。

土層観察ベルトを東西・南北方向に設定し精査を行なった。その結果、埋土は第21図でみると、逆三角堆土と三角堆土が発達した自然埋没と考えられるものであった。

竪穴の大きさは東西410cm、南北(330)cmを計る。壁はほぼ垂直に立上り良好であるが、東壁は北壁と西壁に比べるとややなだらかである。これは壁土が崩落したためであろう。壁高は、東壁が47.5cm、西壁は34cm、北壁が47cmと高い。床面はほぼ水平の堅いタタキ床で良好で、南側の欠損部付近は木の根と思われる小さな穴が多くやや軟弱である。柱穴は発見できなかったが、竪の前でピットを発見している。その位置関係からみて灰だめの穴と考えられる。周溝が東壁直下の一部、西壁と北壁直下にみられ、深さは東壁直下が5~8.5cmで、西と北壁直下のものは3~5cmである。

竪は東北隅に石組粘土カマドが構築されていた。袖石と天井石とも遺存状態は最良で、袖石と天井石の外側を灰白色の粘土が包んでいた。竪内の焼土は厚く6cmを計る。

発見した土器は少ないが土師器・須恵器・灰釉陶器がある。

土師器は壺・鉢釜で、壺は第22図1~3の3点で、1と2は歪みが著く、1と底部整形は糸切後にヘラ削りを行なっているが、それも粗く糸切痕がまだ残っている。わずかではあるが内・外面とも炭化物の付着がみられる。2は高台壺の底部破片で内面黒色研磨されたものである。甕は小形のものと大形のものがみられ、9~11は大形の甕で、9と10は口縁部破片で内・外面とも炭化物が付着している。11は約2分の1が残存するので、外面の胴上半には炭化物の付着がみられる。9と11は竪内出土である。鉢釜は、破片1点で5号住居址でも記したように第20図5に接合した。本址と5号住居址は30m離れている。

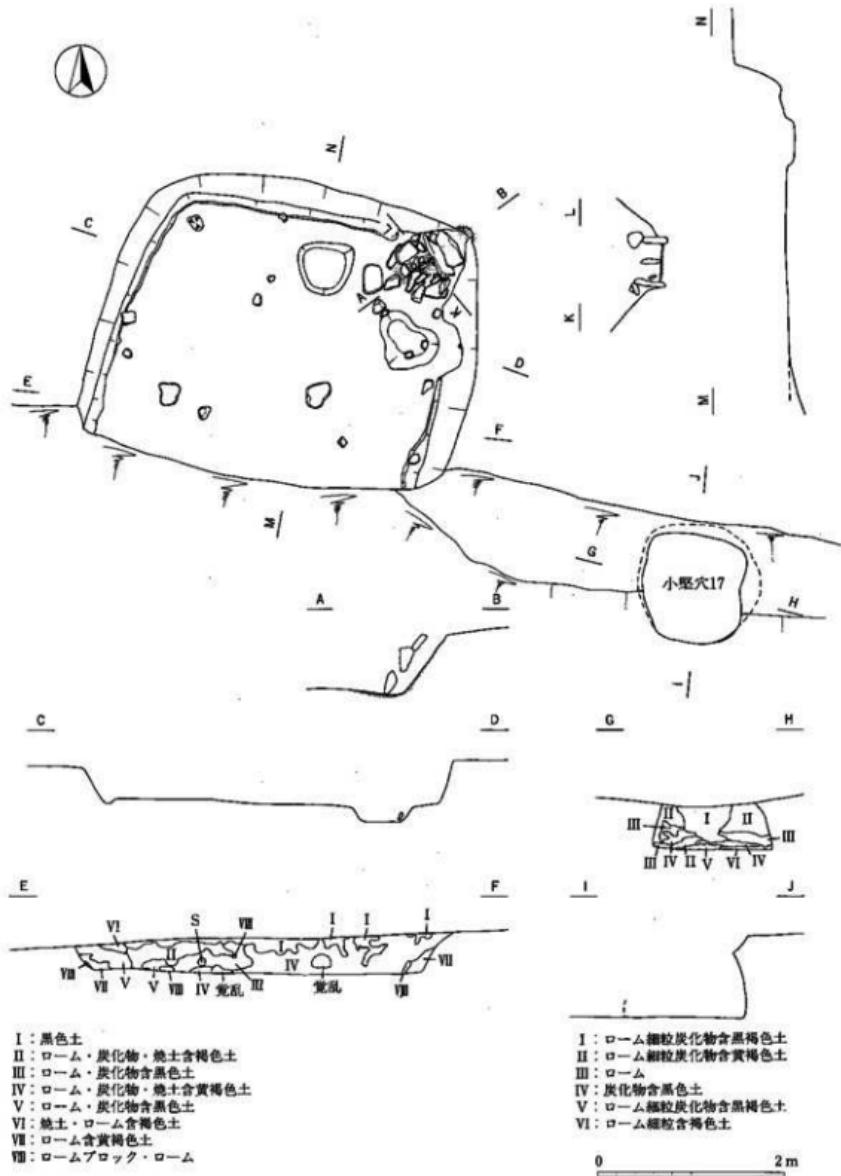
須恵器は大形甕の破片で、器形の復原できるものではない。

灰釉陶器は4~8の5点で、4~6は碗であり、4はほぼ完形、5と6は小破片から器形を復原したものである。6は皿でやはり破片から器形を復原したものである。8は甕の底部破片と思われる。甕の颈部破片もみられるが同個体であるかは判らない。

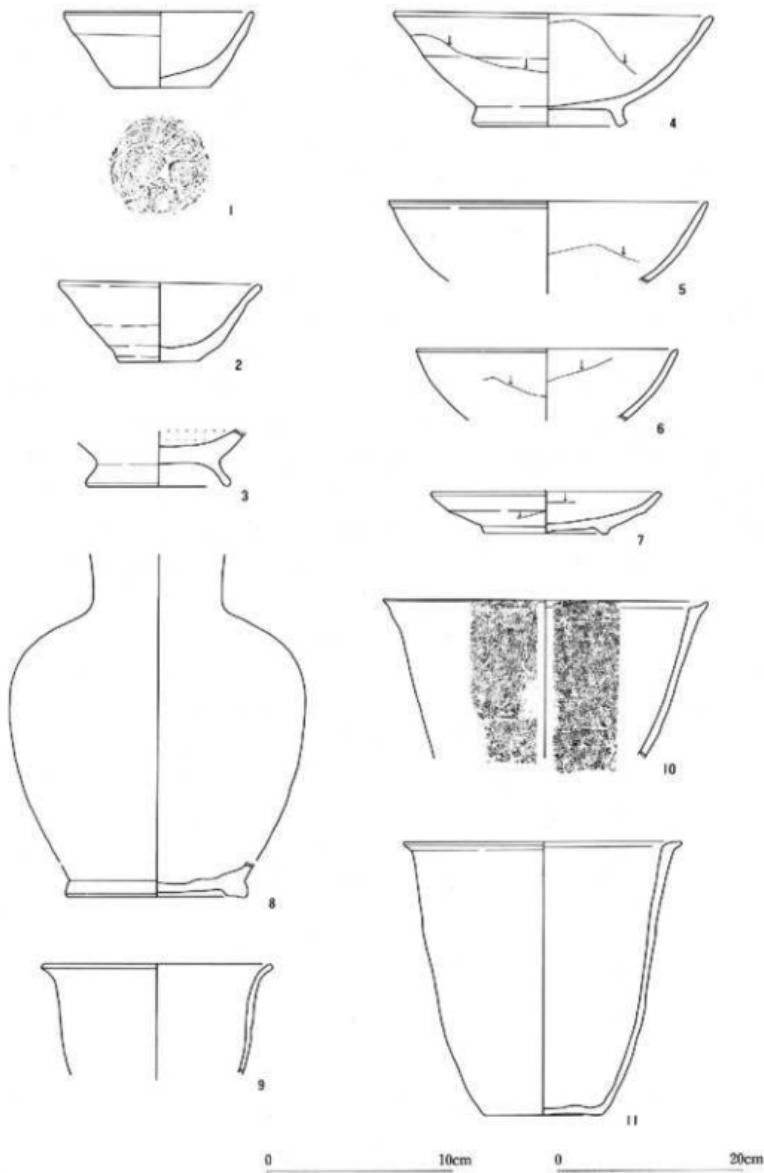
第7号住居址 (第5・23・24図)

6号住居址の東、BU-44~46、BV-44~47、BW-44~47、BX-43~47、BY-44~46の19グリッドに跨る隅丸方形を対する竪穴住居址である。

本址からは、竪を2個所確認したことと、周溝のあり方から住居の建て替えが容易に考えられるもので、新旧の2時期にわたる住居址を考えている。それは、北壁に竪を持つ大きな新しい住居址、東壁に竪を持ち、周溝からプランを推定した古い住居址である(第5・23図)。



第21図 長峰遺跡第6号住居址、小堅穴17実測図 (1:60)



第22図 長峰遺跡第6号住居址出土土器実測図 1~8 (1:3) 9~11 (1:6)

本址を発見した地点は、すでに地主さんが表土を取りさっていたこと、ビニールハウスを建てるための整地等による搅乱は著しく、最悪の状態であった。中でも西壁付近はロームまでも削られていたし、床面までの搅乱は広範囲に及んでいた。また、搅乱穴1と2は深さ20~30cmを計り、その掘り込みはスコップによる掘痕が顕著に認められる極く新しいものであった。地主さんが、以前にこの辺りからロームを掘り採ったことがある。と聞いていることからその時のものであろう。

7号住居址新

竪穴は東西682cm、南北680cmと大きく、本遺跡における最大規模のものである。壁は土取りですでに破壊された個所も多いが、残存する東壁と北壁はほぼ垂直に立上り良好で、南壁は黒色土となりやや不明瞭である。壁高は東と北が高く南が低くなるが、西壁が残存していれば自然傾斜の関係で一番高くなるものと思われる。それぞれのたかさは東が20cm、南は5cm、西壁は(9)cm、北壁が17cmを計る。床面は堅いタタキ床でほぼ水平であるが、硬い部分は北壁下から南の周溝まであり、周溝付近は貼床ともいえそうな状態であった。周溝から南は黒色土の床となりやや軟弱である。柱穴と考えられる穴はあるが明確ではない。参考までにそれらの大きさを記しておきたい。P1は径50cm深さ65cm、P3は長径40cm深さ7cm、P5は径34cm深さ40cm、P6は径28cm深さ26cm、P7は長径66cm深さ24cm、P8は深さとも48cmで自然石2点が入っていた。P9は径28cm深さ25cm、P10は径27cm深さ42cm、P11は径50cm深さ37cmで自然石1点が入っていた。P12は長径40cm深さ16cm、P13は長径28cm深さ13cmある。この他に性格の判らない大小様々な穴がある。

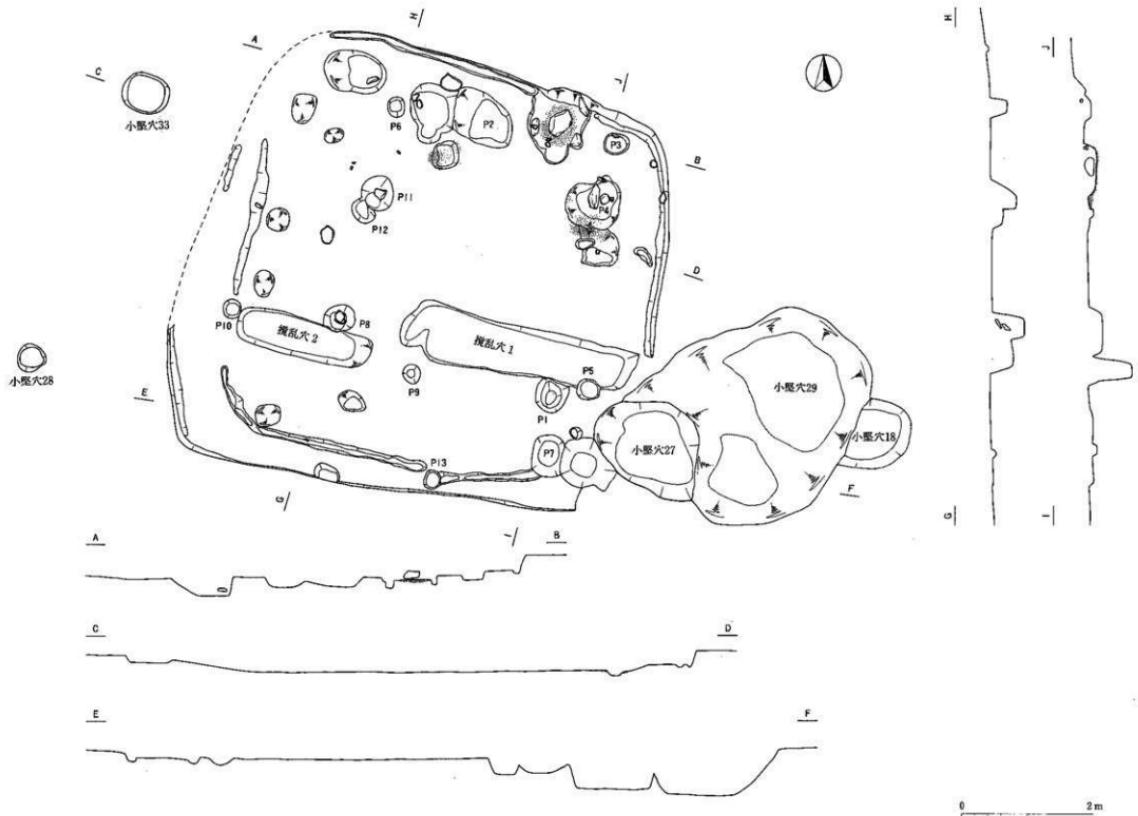
竈は火床である焼土の状態からみて東壁の中央より東寄りに構築されていたが、竈石は抜き取られていた。煙の隅には、火熱によって変色し破損しやすくなった平板石が積み重ねられていることから、最近の土取りで竈石は抜き取られたものと思われる。竈の火床の焼土は厚さ9cmを計る。

7号住居址旧

竈の火床と周溝から旧住居址を考えたが、その大きさは不明瞭な点が多い。東西方向は西側の周溝から竈までの範囲を考え(560)cm、南北方向は南側の周溝から北壁近くまでの(600)cm位であろう。周溝は南側は幅16cm前後で深さ2~8cm、西側は12cm前後であるが広い所は22cmを計り深さ2~5cmと浅いことから、旧住居址の床面は新住居址よりやや高かったと思われる。竈の火床の焼土は12cmと厚く、新住居址のものよりしっかりと焼けている。

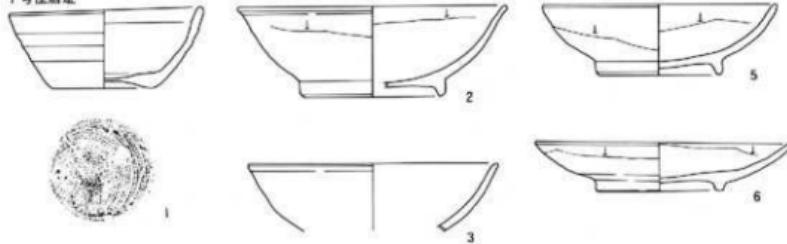
発見した土器は少ないが土師器・須恵器・灰釉陶器がある。

土師器は壺・耳皿・甌があり、壺の第24図1はP8出土で、甌のあるもので床面に糸切り痕が残る。この他に小破片で図示できなかったものの中には内面黒色研磨されたもの、高台が付けられたもの、糸切り痕のみられるものなどがある。やはり小破片で器形が復原できないが、口縁部

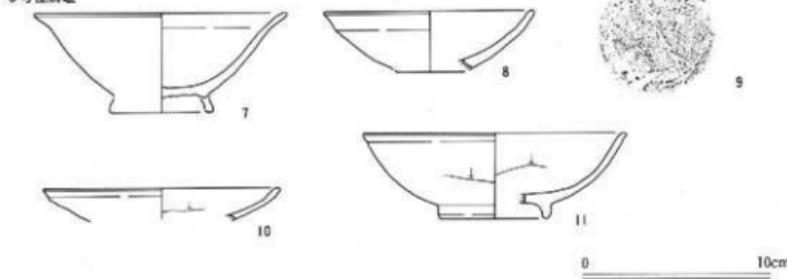


第23図 長峰遺跡第7号住居址、小堅穴18・27~29・33実測図 (1:60)

7号住居址

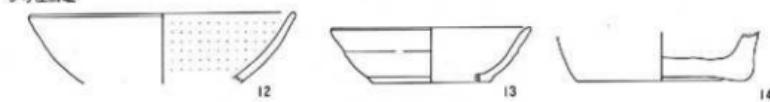


8号住居址

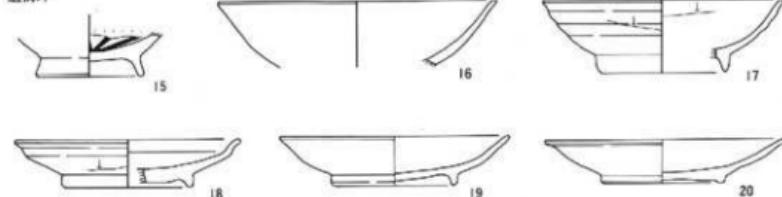


0 10cm

9号住居址



遺構外



第24図 長峰遺跡第7・8・9号住居址、遺構外出土土器実測図 (1:3)

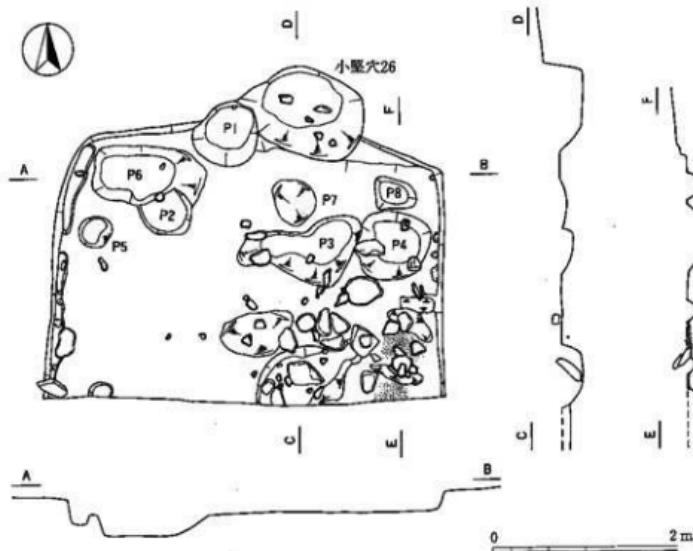
の整形（曲がり具合）から耳皿と思われるものがある。甕は小形のものと大形のものがみられるが、小破片ばかりで器形の復原できるものではない。

須恵器は大形甕の破片で、器形を復原できるものではない。

灰釉陶器は2~6の5点で、2~5は碗、6は皿で破片から器形を復原したものである。16の碗と17・20の皿は、本址の埋没を確認する以前に床面近くと上層から出土した。土取りの搅乱が著しかったからグリッドで取り上げた資料であるが、本址に伴うものと思われる。

第8号住居址 (第5・6・21図)

绳文時代の4号住居址、平安時代の8号住居址と重複し残存部は少ない。BH-47・48、BI-47・48、BJ-47・48の6グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址と思われる(第5・6図)。新旧関係については、本址より2号住居址が新しく、4号住居址が古い。埋土は検出面から床面までが6~7cmと浅く、明確なことは判らないが自然埋没と思われる。埋土中には多量の炭化物と焼土が含まれていた。焼土が厚かった個所からは炭化物の発見もあり、火災による廃絶を考えられる状態であった。



第25図 長峰遺跡第9号住居址、小窓穴26実測図 (1:60)

竪穴の大きさは東西（140）cm、南北372cmを計り、壁の立上りはあまり良くない。壁高は西壁が6cm、北壁が7cmを計る。床面はほぼ水平となる軟弱である。なお、重複した縄文時代の4号住居址の炉址の上だけに貼床がみられた。柱穴と竪穴の発見はなかったが、竪穴は2号住居址と重複する北壁か東壁に構築されていたものと思われる。

本遺跡から竪穴などを見つけることができないまま住居址と考えたのは、遺物の出土状態からである。本遺跡において完形ないしは完形に近い土器が出土したのは全て住居址であり、それ以外からの発見はない。したがって、第24図7に図示したほぼ完形品の発見と、器形が復原できる土器と灰釉陶器の出土量からである。

発見した土器は少ないが、土器・須恵器・灰釉陶器がある。

土器は壺・鉢・甕があり、壺は第24図7～9の3点で、7は高台壺で高台は剥落している。その剥落した高台部分が磨滅していることから、高台が剥落した後も使用されていたようである。また、わずかではあるが内・外面に炭化物の付着がみられる。8は小破片から器形を復原したもので、9は糸切り底のものである。小破片で図示できなかったものの中には内面黒色研磨されたものがある。鉢は5号住居址でも記したように、図示できなかったが鉢の鉢部破片で、5号住居址出土破片と接合した。本址と5号住居址は14m離れている。甕は小破片で器形を復原できるものではない。

須恵器は大形甕の小破片が1点で、器形を復原できるものではない。

原釉陶器は10・11の2点で、破片から器形を復原したもので10は皿、11は碗である。

第9号住居址（第5・25・24図）

7号住居址の東方、CO-40～42、CP-40～42、CQ-41・42の8グリッドに跨る竪穴住居址で、本遺跡で一番東からの発見である（第5・25図）。住居南側は昭和30年代の開田事業によって破壊され、半分位を調査しただけで明確なことは判らないが、平面形は六角形（？）になるものであろう。北側で小竪穴26と重複したが、新旧関係については、本址が新しく、小竪穴26が古い。

土層観察ベルトを南北方向に設定し精査を行なった。桑畑であったこともあり根による搅乱は著しかったが、埋土は逆三角堆土と三角堆土が発達した自然埋没と思われるものであった。

竪穴の大きさは東西422cm、南北（348）cmを計り、壁はほぼ垂直に立上るが西壁の南側は黒色土の壁でやや不明瞭であった。壁高は東と北が高く西が低くなる。それぞれの高さは東壁が18cm、西壁は12cm、北壁は20cmを計る。床面はタタキ床でほぼ水平であるが、地山の礫がみられる所もありあまり良くない。検出位置から柱穴と思われる穴はみられたが、明確なものではない。参考までに深さを記すとP1が26cm、P2が9cm、P3が19cm、P4が11cm、P5が12cm、P6が20cm、P7が5cm、P8が10cmとみな浅いものばかりである。なお、P6、P7、P8には貼床が行なわれていた。西壁直下には幅10～16cm、深さ6～9cmの周溝がみられ、周溝内には小ピットが穿たれていた。

竪穴は残存する東壁の南外れに石組粘土竪穴が構築されていた。天井石は崩れ、袖石の多くも崩れ

ていた。付近に散乱する石が竜石と思われる。火床である焼土の北側にはしっかりと灰白色の粘土が残っていた。竈内の焼土の厚さは9cmを計る。

発見した土器は少ないが、土師器と灰釉陶器がある。

土器は壺と甕で、壺は第24図12・13の2点で、12は内面黒色研磨されたもので放射状と思われる暗文が施されているが、小破片でよく判らない。13も小破片から器形を復原したもので、僅かに残る底部には糸切り痕がみられる。甕は14の底部破片で、外面にわずかではあるが炭化物の付着がみられる。

灰釉陶器は碗の小破片で、器形を復原できるものではない。

(2) 遺構に伴わない遺物 (第17・24図)

遺構に伴わない資料は、土器と石製品がある。

土器は土師器・須恵器・灰釉陶器の破片があり、土師器は壺と甕で、壺は小破片ばかりで器形を復原できるものはないが、第24図15は高台壺の底部破片で、内面黒色研磨され放射状の暗文が施されている。甕は小破片ばかりで器形が復原できるものはない。

須恵器は、甕の底部破片と大甕の頸部と胴部破片があるが、器形が復原できるものはない。

灰釉陶器は第24図16～20の4点と破片がある。16と17は碗、18～20は皿である。16・17・20の3点は、7号住居址で記載したように、住居址の埋没を確認する以前に、床面近くと上層で発見したものである。

石製品は、磁石の破損品第17図4で砂岩製である。

4 近世～現代の遺構

近世から現代の遺構で、タメと呼称して調査したものは、畑の隅にあたる農道際に下肥や糞の糞を蓄えておいた施設である。形状と大きさに違いがみられた。

(1) タ メ

タ メ 1 (第5・18図)

AX-48・49、AY-48・49の4グリッドに跨って発見された(第5・18図)。平安時代の3号住居址と重複していたが本址の方が新しい。石組みの平面形は220×220cmの円形で、主体部の平面形は石の幅だけ狭くなる128×120cmの円形を呈し、壁と底は石灰とロームで固められしっかりしたものである。底はやや丸くなるが深さは65cmを計る。

タ メ 2～4 (第5図)

タメ1はBK-44・45、BL-44・45の4グリッド、タメ3はBQ-43とBR-43の2グリッド、タメ4はCJ-42・43、CK-42・43グリッドで発見された(第5図)。平面形は隅丸長方形を呈し、壁と底は石灰とロームで固められ底は平らである。大きさはタメ2が東西170cm、南北90cm、深さ42cm。タメ3は東西176cm、南北128cm、深さ60cmである。タメ4は検出しただけで精査していないが、東西220cm、南北160cmを計る。

遺物は、平安時代の土師器の小破片2点がタメ2から出土しているが、後に流れ込んだものと思われる。したがって、タメの明確な時期を決定できる資料はない。

タメ2～4の長軸は東西方向となり、長軸が農道に接していたことになる。これは作業の能率を考えた構築であったと思われる。

V まとめ

調査の結果、縄文時代・弥生時代・平安時代の複合遺跡であることが判った。原村における弥生時代の遺跡調査は初めてのことであり、その発見意義は大きい。発見した遺構・遺物ともそれほど多くはないが、調査から整理作業の折々に感じたことを書いてみたい。

縄文時代

長峰遺跡が位置する原村柏木地区は、国史跡の阿久遺跡をはじめ前尾根遺跡や南平遺跡などの大遺跡が多く、縄文時代の遺跡密集地帯にあたる。本遺跡は、やせ尾根に立地しており、遺構と遺物の発見を期待し調査を実施した。

縄文時代の集落跡としてはあまり立地条件はよくなかったようで、時期の違う住居址3軒と小堅穴31基を発見調査した。しかし、遺構に伴う遺物は極めて少なく、帰属時期が判明しているものの方が少ない。

住居址を3軒発見したが伴出遺物は極めて少なく、明確なことは云えないが、数少ない土器と住居址の重複関係から、3軒の住居址は帰属する時期が異なり、中期初頭?、中葉、後葉とも住居が1軒だけで営まれていたことになる。これと同様に1軒の住居址だけを発見した遺跡が、村内では中新田の堤之尾根遺跡（中葉）、柏木の前沢遺跡（後葉）、柳沢の弓振日向遺跡（後葉）があり、縄文時代中期の小規模集落を考える上で良好な資料になろう。

小堅穴はロームにしっかりと彫り込まれたもので、「袋状」を呈する貯蔵穴と考えられるものもあったが、やはり伴出遺物があまりにも少なく、住居址と小堅穴の関係について述べることはできない。

弥生時代

弥生時代の住居址は発見できなかったが、「袋状」を呈する小堅穴3基を検出調査した。その形態は貯蔵穴と思われるもので、付近に生活の場が埋もれていることは容易に考えられるもので、ハケ岳西麓には、無いと云われてきた弥生時代の遺跡を考え直す発見である。

平安時代

平安時代の集落跡調査は年々多くなってきているが、住居址の発見だけで貯蔵穴や墓穴が発見されることの方が少ない。

集落跡調査と云っても住居址を発見しただけで、本当にすっきりしたものであり、これが平安時代の村の姿を考えるには、余りにもすっきりしすぎている。平安時代の人たちは貯蔵穴や墓穴

を必要としなかったのか考えさせられ、集落跡から住居址以外の遺構（施設）が発見されないことに疑問を持つようになって久しい。

昨年調査した堤之尾根遺跡でも、同じことを想い報告書で述べたが、そのことを解決できないまま、再び平安時代集落跡の調査を実施した。くどくなるが同じことを書いてみたい。

付近で調査した平安時代の集落跡で、住居址以外の遺構が発見されているのは、茅野市・判ノ木山東遺跡で小豎穴1基（報告書では、土壙1基）、茅野市・頭殿沢遺跡では小豎穴2基（土壙2基）が発見され、1基は火葬墓と考えている。茅野市・御狩野遺跡では鉄鏃・灰釉陶器などが出土した墓壙1基、原村・大石遺跡で小豎穴4基（土壙4基）を発見しているくらいである。

貯蔵穴がないなら墓穴を考えても、当時は、すべての人を埋葬していないと云われていることから、墓穴がなくてもよいことになる。しかし、原村で調査した平安時代の集落跡（住居址）は梨の木沢・堤之尾根・大石・ヲシキ・居沢尾根・阿久・家裏・金芳・堤之尾根の9遺跡におよび、明らかに墓穴と判するものを1基も発見できなかったことに大きな疑問が残り、墓穴を検出調査している遺跡に目を向けると、塩尻市の吉田川西遺跡や山形村の殿村遺跡は住居域と墓域が接近し集落内といえるものである。南箕輪村の神子柴遺跡や、茅野市の狐塚遺跡と御狩野遺跡は、日常生活の場から離れたところに埋葬されていたようである。墓穴だけを発見した御狩野遺跡は八ヶ岳西麓の遺跡であり、また、狐塚遺跡は近くに立地する遺跡で、当方では住居域と墓域は違う尾根上にある可能性が高いようである。しかし、それを明らかにできる資料がないまま、土地改良事業のような大規模開発で墓域を消滅させているのかもしれない。1日も早く住居域と墓域の在り方を究明しなくてはならないようである。

最後に、関係者各位ならびに調査にたずさわった方々に厚く御礼申し上げる次第である。

引用参考文献

- 1966 03 長野県教育委員会「昭和40年度 松本諏訪地区新産都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書
岡谷市庄之畠遺跡」
- 1969 03 南箕輪村教育委員会「神子柴遺跡緊急発掘調査報告書 第3次発掘調査」
- 1974 07 諏訪清陵高等学校地歴部考古班「長峰B遺跡」（『土』8）
- 1976 03 長野県教育委員会「昭和50年度 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・原村
その1、富士見町その2」
- 1979 03 長野県教育委員会「昭和51年度 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・原村
その2」
- 1981 03 長野県教育委員会「昭和51・52年度 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・
原村その3」

- 1981 03 長野県教育委員会『昭和51・53年度 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市
4・富士見町その3』
- 1985 07 原村役場「原村誌 上巻」
- 1987 03 山形村教育委員会『山形村遺跡発掘調査報告書第6集 県営圃場整備事業東筑摩郡山形村竹田
地区埋蔵文化財緊急発掘調査報告書殿村遺跡』
- 1989 03 長野県教育委員会『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書3 中央自動車道長野線埋
蔵文化財発掘調査報告書3 塩尻市内その3 吉田川西遺跡』
- 1989 03 原村教育委員会『金芳遺跡 県営圃場整備事業弓張地区に伴う緊急発掘調査報告書』
- 1990 03 茅野市教育委員会『狐塚遺跡 前宮公園建設工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』
- 1990 03 原村教育委員会『栗の木沢・中道通・御射山沢・栗の木沢西遺跡御射山地区県営畠地帯総合土地
改良事業に伴う緊急発掘調査報告書』
- 1991 03 原村教育委員会『御射山道北・古屋敷西・堤之尾根遺跡 御射山地区県営畠地帯総合土地改良事
業に伴う緊急発掘調査報告書』

表3 長峰遺跡小空穴一覧

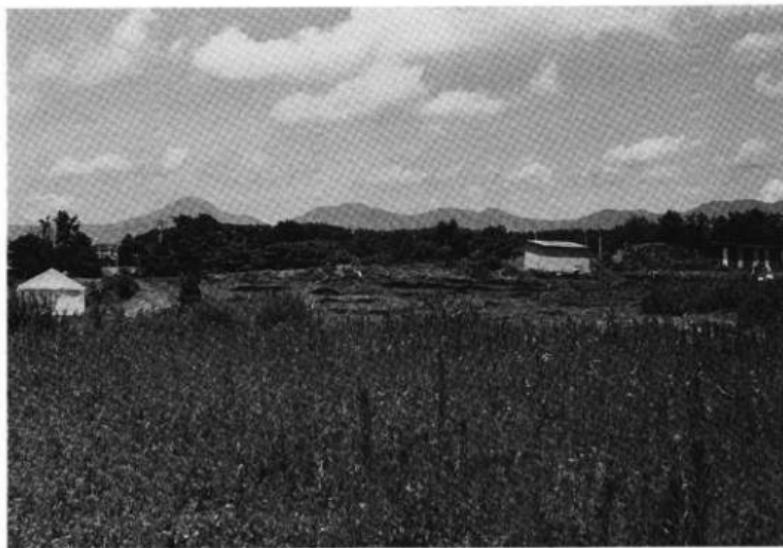
表中のカッコ付けの数値は、重複した小空穴で現存部分を示す

番号	検出位置 グリッド	平面形	規模			埋土・出土遺物など
			長軸	短軸	深さ	
1	AE-56 AF-56	不整橢円形	217	112	67	土師器破片1
2	AV-52 AW-52	橢丸方形	108	87	25	
3	AV-47 AW-47	橢円形	92	72	27	
4	CM-43	橢円形	88	79	21	褐色土
5	BN-46	橢円形	80	72	14	褐色土
6	BN-45 BO-45	橢円形	88	80	28	褐色土 凹石1(破損品)
7	BL-47 BM-47	不整橢円形	150	148	63	ロームブロック含黒褐色土
8	BP-47	円形	74	68	58	黒褐色土 黒曜石剥片1
9	BO-47 BP-47	円形	88	76	46	黒褐色土 縄文土器破片5 黒曜石剥片1
10	BM-47 BN-47 BN-48	円形	96	92	31	黒褐色土
11	BJ-46 BJ-47 BK-46 BK-47	(円形)	160	(160)	74	弥生土器破片66
12	BK-46	(橢円形)	(82)	(79)	34	弥生土器破片6
13	BQ-48 BQ-49 BR-48 BR-49	円形	97	96	52	上面黒褐色土のレンズ状堆積 黒曜石剥片2
14	BQ-49 BR-49	橢円形	90	76	48	上面黒褐色土のレンズ状堆積 縄文土器破片25 打製石斧1(破損品) 陶器破片1(現代?)
15	BQ-49	円形	92	90	60	上面褐色土のレンズ状堆積 縄文土器破片1

16	BQ-49 BQ-50	円 形	100	90	27	褐色土 縄文土器破片1 打製石斧1 (破損品) 凹石1
17	BR-43 BR-44 BS-43 BS-44	(楕 円 形)	(120)	110	71.5	黒色土 黒曜石剝片4
18	CA-44 CB-45	(楕 円 形)	(86)	108	25	黒褐色土
19	BJ-46	(楕 円 形)	154	(68)	47	ロームブロック含黒褐色土 弥生土器破片1 縄文土器破片3 黒曜石剝片9 土師器破片2
20	BP-50	円 形	55	52	11	黒褐色土
21	BO-50 BP-50	円 形	126	116	114	黒褐色土 黒曜石剝片1
22	BO-50 BO-51 BP-50 BP-51	円 形	92	84	42	褐色土
23	BN-51	円 形	58	57	13	黒色土、石鐵1 黒曜石剝片1
24	BN-49 BN-50	円 形	72	68	9	褐色土
25	BN-47 BN-48 BO-47 BO-48	楕 円 形	215	177	38	ロームブロック含黒褐色土 打製石斧1 (破損品)
26	CP-41 CP-42 CQ-42	隅 丸 方 形	118	90	44	黒褐色土
27	BX-44 BY-44	(不整椭円形)	(173)	(133)	58	縄文土器破片1 凹石1 黒曜石剝片2 土師器破片1
28	BT-45	円 形	44	42		黒褐色土
29	BY-43 BY-44 BY-45 CA-43 CA-44 CA-45	(不整椭円形)	(342)	307	92	黒色土 縄文土器破片15 土師器破片5 須恵器破片3

30	BF-49 BF-52	隅丸方形	100	78	45.5	
31	AW-51 AW-52	横円形	88	72	18	
32	BE-50 BF-51	(横円形)	(213)	(58)	31.5	
33	BU-47	隅丸方形	71	60	12	
34	BB-45 BB-46 BC-45	円形	180	178	75	炭化物含真黑色土集石 炉

写 真 図 版



遺跡近景(南西から)



発掘風景(南から)



発掘区近景(南西から)



発掘区近景(南東から)

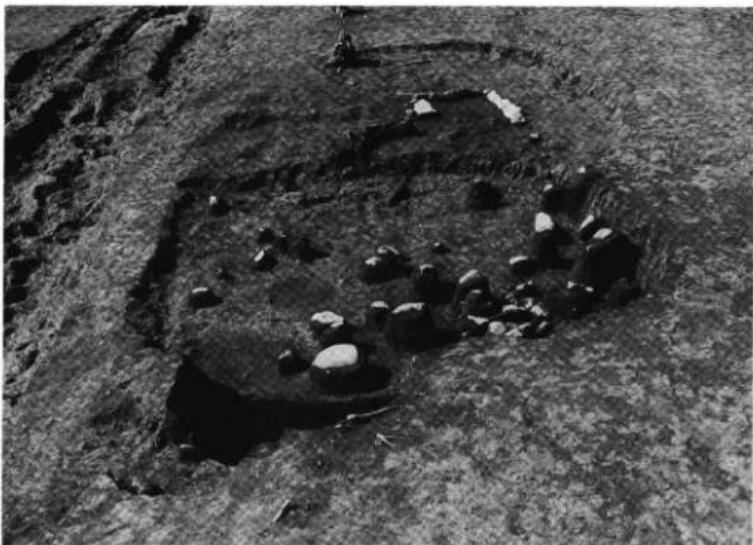


2・4・8号住居址 遺物出土状態
(西から)

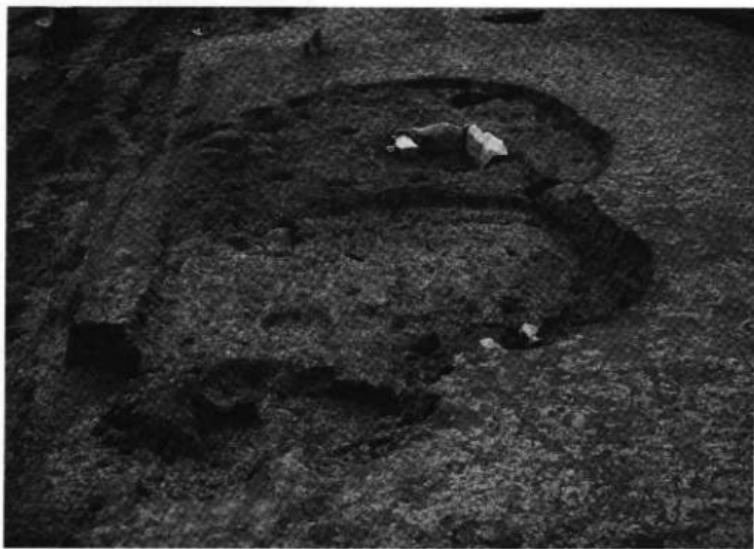


4号住居址 石囲い炉・遺物出土状態
(北から)





2・4・8号住居址 遺物出土状態(東から)



2・4・8号住居址(東から)



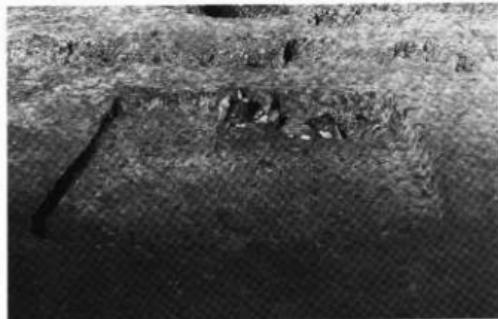
10・11号住居址

（南から）



10号住居址 石囲い炉

（北から）



1号住居址 (南から)



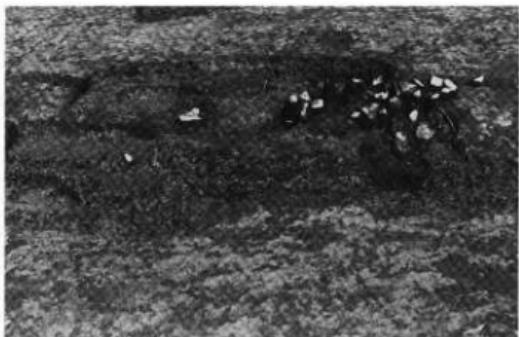
3号住居址
タメ1検出状態
(南から)



3号住居址 (南から)



3号住居址 カマド
(南から)



5号住居址（南から）



5号住居址 P 1
遺物出土状態



5号住居址 カマド
(西から)



6号住居址 土 層（西から）



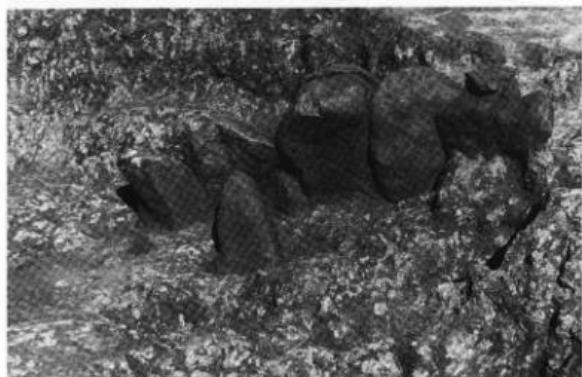
6号住居址（南から）



6号住居址 カマド①
(南西から)



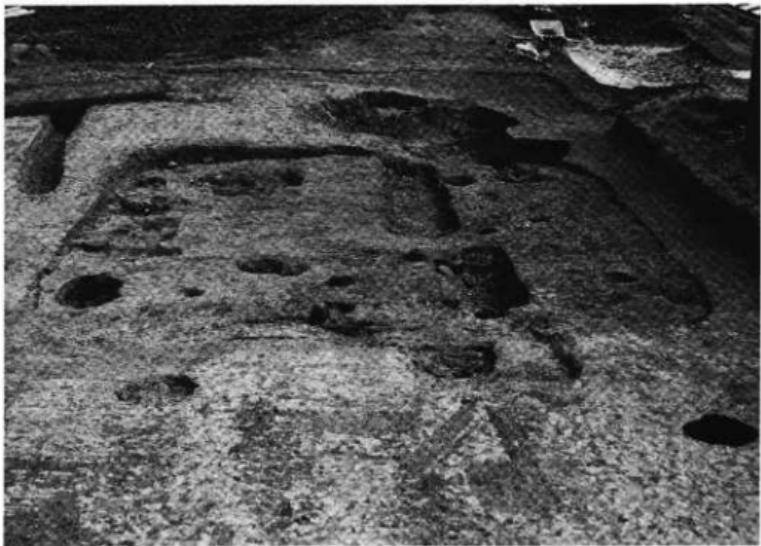
6号住居址 カマド②
(南西から)



6号住居址 カマド③
(南から)



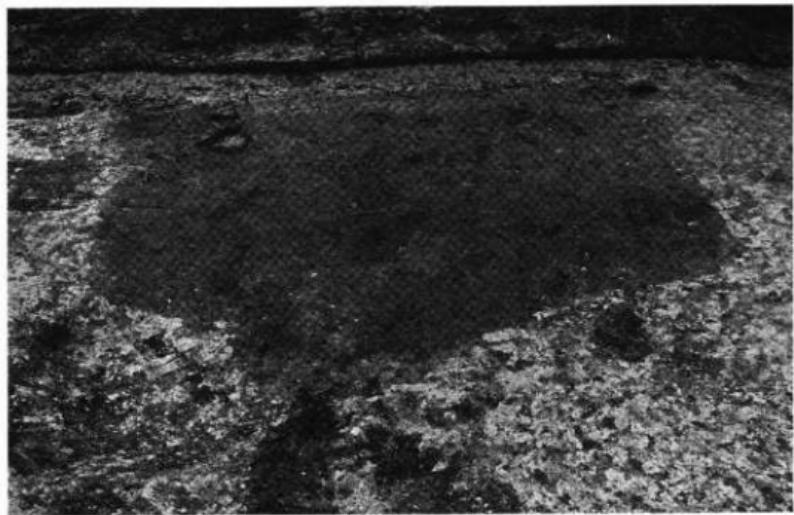
7号住居址(東から)



7号住居址(西から)



発掘風景(西から)



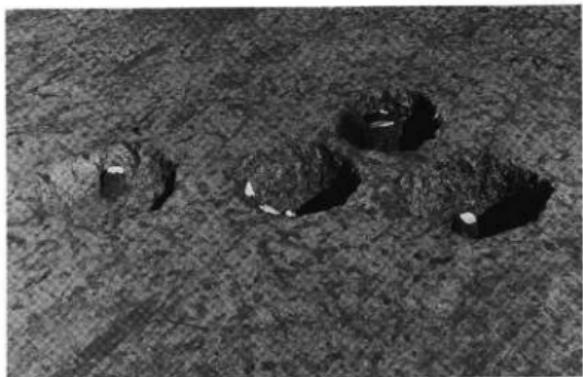
9号住居址 検出状態(北から)



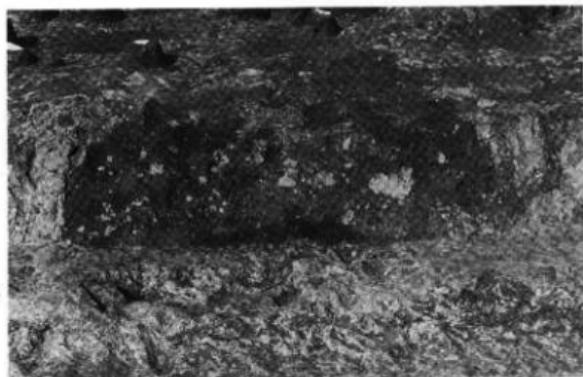
9号住居址 遺物出土状態（西から）



小 穂 穴 群（西から）



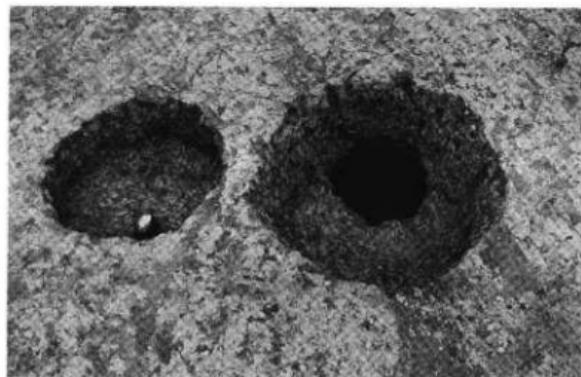
小堅穴13~16
(西から)



小堅穴19 土層
(南から)



小堅穴11・12・19
(南から)



小豈穴21・22
(西から)



小豈穴34
レキ出土状態
(南から)



小豈穴34
(南から)

原村の埋蔵文化財20

長峰遺跡

平成3年度 県営ほ場整備事業丸
山地区に伴う緊急発掘調査報告書

発行日 平成4年2月

発行 原村教育委員会
長野県諏訪郡原村

印刷 日本ハイコム株式会社
塩尻市北小野 4724
TEL 0263-56-2111

